

村上春樹 『眠い』 レポート集

(第51回)2025年10月18日(土)13:45～「眠い」第1回討論
(第52回)2025年11月15日(土)13:45～「眠い」第2回討論
(第53回)2025年12月20日(土)13:45～「眠い」第3回討論
2026年2月14日(土) 「眠い」レポート締切
(第54回)2026年2月21日(土)13:45～「眠い」第4回討論

目 次

- 我々は何をどのように認識しているのか？
— 村上春樹『眠い』を読む — ……………佐野 之人 (1)
- 「眠い」レポート 判断放棄の副作用として極小化された「僕」の抵抗
……………T・T (8)
- 「眠い」村上春樹 を読んで……………田中 克典 (11)
- 村上春樹『眠い』論——規範と身体の間で揺られる生——……………唐 露 (14)
- 「眠い」とは別の仕方で……………大藤 渉 (20)
- そこに愛はあるのか？……………岡部 昌平 (25)
- 村上春樹著『眠い』：読書感想文『村上春樹の武士道』……………奈原 伸雄 (26)
- 小説は未知の出来事をいかに語るか——村上春樹「眠い」を読む
……………村上 林造 (31)
- 【各論要旨】…………… (38)
- 「眠い」本文…………… (40)

我々は何をどのように認識しているのか？

——村上春樹『眠い』を読む——

佐野 之人

はじめに

我々は日常的に認識しつつ生きている、と思っている。しかしいったい我々は何をどのように認識しているのだろうか。ここではそれを、村上春樹『眠い』をもとに考察してみたい。テキストは『村上春樹全作品 1979-1989⑤』版（以下『全作品版』）に従う。

1. 読者はこの小説をどのように読むか？

花嫁の友人として結婚式に出席する「彼女」につき合わされて結婚式に出席した「僕」が結婚式の間中眠くてたまらなかったが、終わったとたん眠気が消えてしまったという、これが小説の題材となり得るのかと思われるほど、何の変哲もないただの日常の出来事である。読者はこの小説をどのように読むであろうか。まずは状況を把握しようとするだろう。その際、読者の関心は「僕」と「彼女」との関係と、「僕」の「眠気」の原因（およびその消失の原因）に集中するだろう。

「僕」と「彼女」との関係について、『講談社文庫版』33頁（以下『文庫版』）に「友だち」という表現は見られるが、『全作品版』には何も記されていない。しかし読者は両者の関係を様々に想像するだろう。会話の感じからするとよそよそしさがなく、かなり深い仲であることが分かる。「彼女」の方は中学校の英語の先生をしていて、しっかり自立しているし、「そんなことを知っていてどんな得があるのよ」といった発言からすると、結構現実的な感じもする。これに対し「僕」の方は職業も分からず、どこことなく頼りない感じがするし、「彼女」に言わせればどうでもいい英語のスペルに異常な興味を示すところからすれば、あまり現実的ではないのかもしれない。「彼女」が「僕」の世話を焼いているようにも見えるし、「僕」が「彼女」に甘えているようにも見える。あるいは「彼女」の、その場に相応しいとは言いかねる服装（「白いシルクのワンピース」）や、「あなた、本当は結婚したいんじゃないの？」という言葉から、「彼女」の「僕」に対する結婚願望を読み取る読者もいるかもしれない。

「僕」と「彼女」の関係は興味深いと言えば興味深いだが、どこにでもある関係とも言える。それより読者が穿鑿したくなるのは「僕」の「眠気」の原因の方だろう。「眠気」の原因は常識的には〈睡眠不足〉か〈退屈〉に決まっている。そこで「彼女」も直ちにまず「どうしてきちんと寝てこなかったの？」と〈睡眠不足〉を咎める。しかし「僕」は「九時間も寝た」と、〈睡眠不足〉が「眠気」の原因であることを否定する。次なる原因は〈退屈〉である。「彼女」はその〈退屈〉の原因を、「僕」が（「僕」にとっても「友人」であるはずの）「新婦」に興味関心がないから、つまり「あの人（新婦）」を「退屈な女」だと思っていることのうちに見定めて、「あなたはあの子のことを退屈な女だと思っているかもしれないけど…本当はとても立派な人なのよ」と、「僕」に「彼女」への関心を引き出そうとする。しかし「僕」は「信じてるよ…ただ今は眠いだけなんだ」と、〈僕の眠気の原因＝あの子の退屈さ〉説を斥ける。そうして「本当のことを言うと、誰かの結婚式に出るたびに眠くなるんだよ」と「僕」は言う。つまりどんな近い人の結婚式でも眠くなる、ということだ。さすがに「彼女」もこれには驚く。「まさか」、「それ作り話じゃないわよね」と「僕」に問い返す。もしそれが本当だとすれば、結婚式という制度自体に対する何らかの「コンプレックス」があると考えざるを得ない。それ

を察知した「僕」は「ペンギンが僕と白熊にむりやりそら豆を食べさせる」から「白熊と一緒に窓ガラスを割って歩く夢」のことを「冗談」として言ってみる。結婚式という制度（そら豆）を押し付ける者（ペンギン）に対する抵抗が「僕」の場合には「眠気」という仕方で表現されている、ということと言わんとしたものであろう。もちろん本心ではない。「彼女」はそのことを察知したのであろう。それ以上の駄弁を「僕」に許さずに、その「コンプレックス」の正体を探り、それを〈結婚願望〉ではないか、と推測する。「僕」はまたへ理屈を述べて反論するが、「彼女」はそれに取り合わず、「要するに…あなたはいつまでも子供でいたいよ」と結論を下す。「要するに」大人が作った制度に対する反抗だというのである。「僕」はそれに対してもう反論をすることはしないが、眠気がなくなったあとで、「コンプレックス？大人になりたいくない？違うな、…僕はただ眠いだけなんだ」と心のうちで自答している。

「眠気」の消失の方はどうであろうか。それについての「彼女」のコメントはない。しかし読者は、

彼女の小さな手が僕の手甲に触れ、微かなコロンの香りがした。彼女の細いまっすぐな髪がぼくのはおを撫でた。僕ははじかれたように目を覚ました。

「もう少しで終わるから我慢して。お願い」耳もとで彼女がそう言った。彼女は胸の形がくっきりと目立つ、白いシルクのワンピースをきちんと着こなしていた。

という表現を見逃さないであろう。そうして結婚式の終了とともに眠気が消えたとき、「僕」が思いついたのが、「彼女」とホテルのプールで泳ぐことだった。そしてこの小説の最後が「彼女の首筋には素敵なコロンの香りがした」で終わっていることと、さきほどの箇所を結びつけるであろう。そこから「僕」の眠気を覚ました原因を、「彼女」への性的な関心に求めるだろう。翻って「僕」の「眠気」の原因をふたたび、そうした直接的欲求に基づかない、形式的な制度に対する無関心から来る〈退屈〉、ないしそうした制度に対する無意識的な抵抗、すなわち〈コンプレックス〉に求めるかもしれない。しかしおそらく「僕」はそれに対しても、やはり「違うな、僕はただ眠いだけなんだ」と言うに違いない。

こうして読者は、「僕」の「眠気」の原因究明に躓くことになる。「彼女」と「僕」の対話を通じて、読者の提出するあらゆる原因が「ちがうな、僕はただ眠いだけなんだ」という仕方で拒否されているのを感じるだろう。

我々はこの小説を読むに際して、まず状況の把握に努めた。「僕」と「彼女」の関係は、謎めいてはいるものの、どこにでもありそうな男女関係のように思われた。そうしてそれ以上にありふれた「眠い」という日常的な経験の原因を探って見たが、そうした原因のすべてが「僕」の「ただ眠いだけなんだ」という言葉によって拒否されていることを経験する（同じことは「僕」と「彼女」の関係についても言えるだろう。「ただ一緒にいたいだけなんだ」と。それどころか、食べることなどを含む、人生におけるすべての行為についても究極的にはこの論法が妥当するだろう）。こうした経験を通して、読者はあらゆる原因以前の「僕」の「ただ眠い」という経験に着目するようになるだろう。この「僕」の「経験」はあらゆる原因による説明を拒否するという意味で、あらゆる原因による説明が届かない領域、根源的な分からなさを含んだ領域である。しかし読者は「僕」の「眠い」という経験そのものに着目するとともに、もう一つの疑問を抱くに違いない。この小説は次のように始まっている。

僕はスープを飲みながら眠りはじめていた。それは一過性の、しかし非常に強固な眠りだ

った。

我々もこうした「眠り」をしばしば経験する。しかしそれが「非常に強固」で、それによって「僕」はすでに「眠りはじめていた」というのだから、ほとんど眠ってしまっている状態である。「僕」はその状態をあとから極めて詳細に想い起して小説として語っているのだが、果たしてそんなことが可能なのか、そうした疑問が読者に生じてくるに違いない。「眠さ」が極めて強固な場合、そもそも人間はそうした自分の「眠さ」について語る事ができるのか、そもそも「眠い」をタイトルとして小説を語ることは可能なのか、という問いである。

2. 我々は自分の「眠さ」について語る事ができるのか？

まず確認しておかなければならないのは、「眠さ」の只中にある「僕」と、それをあとから小説として語っている「僕」が本質的に異なる、ということである。「眠さ」の只中にある「僕」はすでに述べた通り、ほとんど眠ってしまっている状態であり、明確な意識はないはずである。しかし他方で、それについてあとから語る事ができるためには、ボヤッとでも覚えていなければ不可能である。しかし漠然と覚えている、とは一体どういうことなのか。そんなことは可能なのか。あるいはこの小説は「眠さ」の只中にある「僕」を想像しながらあとから創作したフィクションと考えた方がよいのか。この難問はどうも解けそうもない。

「眠さ」の経験が極めて日常的な経験であることによって、この問いは直ちに我々自身の問いとなる。さらに「眠さ」の只中にあるもすでに判断であり、「眠さ」の只中にある自分は自分が「眠さ」の只中にあることも自覚しないだろう、ということを考えるならば、この問いはそもそも「我々は現在の経験を認識することができるのか？」という問いに深化する。

ここでもまず確認しておかなければならないことは、「現在の経験そのもの」と、認識の対象となった「現在の経験」とは本質的に異なる、ということと、「現在の経験そのもの」を漠然とであれ、覚えていなければ我々はそれを明確に認識することはできない、ということである。そしてここでも「漠然と覚えている」ということが問題となり、あるいはそんな難しいことを問題にせず、そもそも我々の認識はすべて我々によるあとの構成であり、フィクションあると考えた方がよい、という考え方も出て来る。

ところで、通常我々は「現在の経験」を何の問題もなくそのまま認識していると思っている。しかし我々は差し当たり大抵、何かに集中しているか、習慣の中に埋没しており、自分のやっていることをいちいち意識してはいない。何かに集中している時、あるいは習慣の中に没入している時、もちろん気を失っているわけではないから、意識はあるだろうが、そのことをいちいち意識はしていない。これを一体どう考えたらよいのか。しかし実際には自分が何をしていたのか思い出せないことがしばしばある。それでは困るから、我々はことさらに自分のやったこと、やっていること、これからやろうとすることを意識しなければならなくなることしばしばである。この時人間は、思惟、意志、想像として（それぞれ「私は考える」、「私は意志する」、「私は想像する」という仕方で）主体的に働くことになるから、自分のやっていることが明確に意識に上ることになる。思惟、意志、想像は統覚と呼ばれるものであるが、その場合、「意識内容」は自我（私）の「対象」になって自我がすでにこれを構成していることに注意しなければならぬ。それと同時にこの場合「現在の意識そのもの」は、この構成された「意識内容」ではなく、「私は考える」などの「自己意識」となっているが、「私は考える」自体は何の内容もないたんなる表象であるということにも注意しなければならぬ。

そこで問題は、改めて「我々は現在の経験そのものを認識することができるのか?」であることになる。この問いに「可能」と答えるのは、知的直観を認める立場（あるいはこれを身体知と呼ぼうがその他何と呼ぼうが、反省的な経験的知を超えた知を認める立場）であり、反省はこうした知的直観を展開（限定）したものだということになる。ボヤッとした全体がまず知的に直観されており、これを反省することで限定された知が展開される、といった立場である。この立場は、（現在の経験そのもの）は、人間がこれを意識すると否とにかかわらず、じつはつねに顕わであるとする立場で、日常性はこうした信念に基づいている。

これに対しこの問いに「不可能」と答えるのは、人間に知的直観を認めず、知（認識）を反省的判断に制限する立場である。この立場からすれば最初のボヤッとしたものは経験的（感性的）直観にすぎず、（現在の経験そのもの）は人間にとってつねに・どこまでも隠れている。我々は最新の知見（定説）を真実であると考えがちであるが、学問（科学）は根本的にこうした立場に立つと言える。

ところで「こうした（現在の経験そのもの）が、隠れているという仕方でつねに顕わになっている」と言う立場が考えられるが、それもすでに断言であり、それに対しては「隠れているという、そのこと自体も隠れている」、と云うだろう。逆に「（現在の経験そのもの）はつねに・どこまでも隠れている」、さらにはそうした「隠れているということ、そのこと自体も隠れている」と云うのも断言であり、「隠れている」ということを何ほどか対象化・実在化しているだろう。顕とも隠とも言えない、分かるとも分からないとも言えない、それが（現在の経験そのもの）であり、そうしたものの上を我々はつねに（言語・思索活動の只中においてすら）生きているのである。

3. 我々は何をどのように認識しているのか?

そこでこの問いに関して、「何を」に対しては（現在の経験そのもの）と言える。これは分かるとも分からないとも、顕とも隠とも言えない。しかしそれでは我々は何をしていいか分からない、生きていくことができない。我々は気がついた時から言語を介してしか生きることができなくなっているからだ。行為するためには状況把握が必須である。その場の状況がどういうものであり、そこにおいて自分は何者であるか、これが分からなければ我々は行為することができない。こうした状況把握において因果性（原因結果）のカテゴリーは必須である。それが分からなければ効果的な行動がとれないからである。これが上の問いの「どのように」に対する答えである。

これは小説を読む場合も本質的に変わらない。小説を読むということは語り手の言葉を聞く者としてその世界を生きることであり、人生を生きるとは自分を、どのような意味においてであれ、主人公とする物語を生きることだからだ。人間は物語なしで生きることはいけない。それゆえ、この小説を読むに際して、読者はまずこの小説世界の状況把握に努めるのである。

「僕」と「彼女」の関係を探り、「僕」の眠さの原因を探ろうとする。これは人間であれば誰でもがする不可避の行為であるが、大抵はそのことに無自覚である。

こうして人間は生きがために、いかなる場合でも状況把握とその原因究明に奔走し、その根底にある（現在の経験そのもの）が放置される。放置されても、あるいは放置されるということも含めて（現在の経験そのもの）が我々の生そのものであることに変わりはない。我々の生の根源的な、こうした（分かると分からない）、（顕と隠）との矛盾、しかも矛盾という言葉で言い表すこともできない事態、これが、「眠い」という気分が、あるいは「眠い」という小説が表現していることではななかろうか。

4. この小説における作者の「実験」

この小説においても作者の実験が、読者のうちに何が起るか、という仕方で試みられているように思われる。作者は、読者が状況把握をまっさきにするだろうということを予想しながら、「僕」と「彼女」の関係を読者に考えさせるような二人の会話を展開し、「白いシルクのワンピース」や「コロンの香り」といった仕掛けを置く。同様に読者が「僕」の「眠さ」の原因を探ることを予想しながら、「彼女」による「眠さ」の「原因」究明の台詞を展開させる。読者は「僕」の「眠さ」の真相究明に懸命になるはずだ。

しかし注意深く読むならば、そうした「原因」のすべてが、「僕」の「僕はただ眠いだけなんだ」という台詞によって却下されていることに読者は気づくだろう。通常ならば因果性のカテゴリーの駆使に突っ走るところを、「僕」はそれにストップをかけている、という点で「僕」は特異な人物である。しかしそれによって読者は「原因」というカテゴリーを適用される以前の「僕」の「眠さ」そのもの、あるいはいかなる「原因」によっても説明のつかない、「僕」の「眠さ」そのものの領域に目覚めることになる。

しかし作者の実験はそれに止まらないようである。「眠さ」が日常的な経験であることから、おそらく作者は、読者が自分の「眠さ」経験に着目するだろうということ、小説のタイトルをあえて「眠い」とし、「僕」に「僕」の「眠さ」経験をきわめて精細に語らせることによって、読者にはたしてそんなことができるのだろうか、という疑念を抱かせることも頭の中にあっただのではないか。それによって読者は「眠さ」についての明晰な言説のレヴェルと、「眠さ」そのものの経験のレヴェルの矛盾の中に置かれることになるだろう。すなわち我々は「眠さ」というきわめて日常的な経験において、いかなる原因によっても説明のつかないのみならず、いかなる言説も届かない経験そのもののレヴェルと、言語活動のレヴェルの矛盾のうちを生きているということ、さらにはこの「眠さ」経験は両レヴェルの矛盾を際立たせるために選ばれた例にすぎず、我々はじつはあらゆる経験においてこうした矛盾のうちにあるということ、このことに読者を目覚めさせる、おそらくこのあたりまでは頭の中にあっただのではないか、そのように思われるのである。この矛盾は、〈我々はずねに〈現在の経験そのもの〉をありのままに認識している〉と〈我々の認識はずねに後からのフィクションにすぎない〉という矛盾、あるいは「矛盾」という言葉が無矛盾との対立のうちで、何らかの意味をもっているとすれば、「矛盾」とさえ言えない事態に他ならず、これが我々の生の実態であろう。

この小説は『全作品版』の改訂の際にかなり改訂の手が加わっている。最後にそれを確認しておこう。まず冒頭「それは一過性の、しかし非常に強固な眠りだった」が加筆されている。

「眠り」の強さの強調であるが、それによってこれからの「眠り」についての語りの精細さとの不調和が一層際立つことになるだろう。

ついで注目されるのが「彼女」の「どうしてきちんと寝てこなかったの？」に対する「僕」の回答である。『文庫版』では「うまく寝られなかったんだよ。何やかやと考えごとをしていたものだから」とあった。つまり「僕」自身が〈睡眠不足〉を「眠さ」の原因として認識している。これに対し『全作品版』ではその部分が「ちゃんと寝たさ。九時間も寝た。嘘じゃないよ」に改められている。この改訂は決定的である。

また「新婦」の人物について、『文庫版』では「僕」が実際に「退屈」に思っていたことを否定することができない。ことに「ぐっすり眠って起きれば〔新婦が退屈な女ではなくて本当は立派な人であることを〕もっと信じるようになれると思うよ」といった台詞は、少なくとも今「僕」は「新婦」のことを退屈な女だと認めていると受け取れるし、「彼女」の「たしかに

退屈かもしれない。でも退屈だっていうのはそんなに重い罪じゃないわ。そうでしょ？」という問いかけに対して、「僕」が「罪じゃないよ」と答えるあたりは、二人とも「新婦」が人間的に退屈であることを認めているかのように読者は受け取るだろう。これに対し、『全作品版』ではこうした叙述を削除し、「とくに退屈だとも、とくに立派だとも思わなかった。ただ単にろくに覚えていないだけの事なのだ」と、「眠気」の原因が「新婦」の人間としての「退屈さ」にあるのではないことを明示したうえで、「ただ今は眠いだけなんだ」と加筆している。このあたりの改訂も決定的である。

決定的な改訂はまだ続く。『文庫版』では「僕」が「睡眠不足のところを員数合わせのためによく知らない女の子の結婚式に突然駆り出されてきただけさ。君の友だちだっていうだけの理由でね」と「僕」の「眠さ」の原因が明確に二つ挙げられている。一つはもちろん「睡眠不足」、もう一つは「よく知らない女の子の結婚式」だから、というのである。これも〈退屈〉の根拠になり得る。さらにそれに続けて「そもそも結婚式なんて好きじゃないんだ。ぜんぜん好きじゃないんだよ。百人もの人間が下らないかきをそろって食ってるなんてさ」と、制度としての結婚式のくだらなさ（それ故の〈退屈〉）を「眠さ」の三つ目の原因として挙げている。『文庫版』では結局「眠さ」の原因が「僕」によって、「睡眠不足」と〈退屈〉であると語られていると言ってよい。ただ『文庫版』でもそのあと「眠いだけなんだ」という台詞がある。これによってこれまで挙げられてきた原因が、実は本当の原因ではなく、「眠いだけなんだ」という事実に思い至った、と解釈することもできなくはないが、この台詞はたんに「僕」の現在の気分を述べたもの、としか受け取れないだろう。

『全作品版』ではこうした「原因」らしきものに関する「僕」の台詞が一切削除され、「眠いだけなんだ」と台詞が繰り返される形になっている。その後「僕」が「結婚式に出るたびに眠くなる」ことを「彼女はなかなか信じられないのだが、そのことについて「僕」は「どうしてかは〔自分でもよくわからないけど、〕とてつもなく眠くなるんだよ。わけがわからないくらい眠くなるんだ。結婚式に出ると」と述べているが、括弧で括られた部分以外は『全作品版』での加筆である。ここでも「眠さ」の原因のなさや「眠さ」の強烈さが強調されている。

そうして最後に決定的な加筆が行われる。『文庫版』では「コンプレックス？」となっている箇所である。これだけであれば、『僕』が「そうかもしれない」と感じたとも受け取れる。読者はこの〔コンプレックスの〕方向で「僕」の「眠気」の原因を探るであろう。あるいは語り手「僕」に、作者村上春樹を重ねて、「僕」の「眠気」の原因を作者自身の生い立ちや体験に求める解釈を繰り返すかもしれない。ところが、これに対して『全作品版』では「コンプレックス？」の部分は「コンプレックス？大人になりたい？違うな、と僕は思った。僕はただ眠いだけなんだ」となっている。すなわち『全作品版』ではここでも「眠気」の原因を一掃し、「僕はただ眠いだけなんだ」と繰り返している。

こうして『全作品版』では徹底して「僕」は「眠気」の原因を拒否し、「ただ眠いだけ」を繰り返している、と言える。また「眠気」の強さを強調し、精細な「眠気」についての語りとの不調和を際立たせている。こうした改訂の実際によっても、上述の作者のこの小説における実験を裏付けることができるように思われるのである。

5. 残された問題——この小説はどのようにして書かれたのか——

最後に「残された問題」として、「この小説はどのようにして書かれたのか」を述べておきたい。すでに明らかなように、我々の生は知的直観というような仕方、我々の認識に、たと

えそれが隠れているという仕方であっても、それを含めて丸ごと、ボヤっとした仕方であれ、我々の認識に開けているのか、あるいは我々は知的直観をもちえず、我々の認識はどんな場合でもあとからの、しかもこちらからの都合のよい「構成」(フィクション)であるのか、という二者択一もすでに言語による分別であり、我々の生にせよ、認識にせよ、こうした分別以前を元初としている。文学を含む芸術、哲学、宗教はこの元初の領域に踏み込み、それに表現を与える。この『眠い』という小説もそのようにして成り立っている。単なる事実や記憶の再現でもなく、単なる作り話という意味でのフィクションでもない。作者がみずからの魂の奥底に沈潜し、語り手「僕」となることによって、一見不可能に思われる、「眠い」をテーマとした小説も、それが文学であるが故に、何の不思議もなく可能になるのである。

「眠い」レポート

判断放棄の副作用として極小化された「僕」の抵抗

T・T

要約

「僕」は内面を直接的には語らず、潜在的な心情（押し付けへの反発や破壊衝動）は幻影や冗談を介して漏れ出るのみである。内面への直接アクセス抑圧→意味を見出せない→判断放棄の状態になっている。結婚式（儀式）は意味のかたまりなので「僕」は好きになりようがないが、判断放棄の副作用として自発的な抵抗は難しい。かわりに抵抗が「眠り」＝「意識の切断」という極小の形で現れ、判断放棄に由来する他責思考のために「白いガス体」＝「意識の切断インターフェイス」として外在化し「僕」を誘惑するという形を取っている。

1) 「僕」はあまり内面を語らない

「僕」が自分自身の内面について語ったことは多くはありません。わかりやすいものとしては、以下の2つくらいかと思います。

- ① 結婚式はぜんぜん好きではない。
- ② 唄が始まりフラッシュがたかれた後「スーツケースもなしに知らない街に取り残されたような気分だった。」

結婚式という場に乗ることができず、疎外感を感じている、ということだろうと思います。

これら以外には「ふうん、と僕は思う。」「ただ単にろくに覚えていないだけの事なのだ。」「違うな、と僕は思った。僕はただ眠いだけなんだ。」といった調子で、自分の内面の深堀りを（多分、あえて）避けているようです。

2) 「僕」は内面への直接アクセスを抑圧している

それなら「僕」の内面は全く見えないのかと言うとそんなことはなく、以下の2か所に漏れ出ていると思います。いずれも「僕」の内面そのままの記述という形を取っていませんので、もしこれが内面の発露であれば、という仮定ではありますが。

- ③ 牡蠣を食べた時の幻影「僕は見事な翼手竜になってあっという間に原始林を飛び越え、荒涼とした地表を冷ややかに見降ろした。」

→「僕」（の心？）は翼のある恐竜（＝爬虫類＝冷血動物）であり、地表（「僕」の身体がある場＝結婚式に象徴される形骸化した社会規範）を超越的な冷やかな視点で見下している。

- ④ 「彼女」の「きっとコンプレックスよ」という決めつけを否定した際、「冗談」として言った「変な夢」：「白熊と一緒に窓ガラスを割って歩く夢なんだよ。でも本当はペンギンが悪いだ。ペンギンが僕と白熊にむりやりそら豆を食べさせるんだ。」

→他者からの押し付けに対する反抗心（他責思考）と破壊衝動がある。

（「彼女」の「復讐よ」という見立ては、当たらずも遠からず。）

つまり僕は「結婚式はくだらない」「押し付けられている」「壊したい」といった思いを潜在的に抱えているものの、それを幻影や冗談に迂回させており正面切って言語化できない（させてもらえない、あるいは自分で止めている）のではないか、それというのも自分の内面への直

接アクセスが抑圧されているからではないか、と思います。

3) 「僕」は意味を見出すこと、判断すること、拒絶することができない

そのために、こういうことが起きていると思います。

内面への直接アクセスを抑圧

→自分が何にどのような意味を見出すのかという洞察は得られない

→自分の規準で判断することが出来ない

→判断を状況（他者）に委ねることになり、無理強いされると拒絶出来ない

「僕」は結婚式に出てしまった理由として「でもうまく断れなかった。断ったら君が気を悪くすると思ったから」と言っていますが、それは無理からぬことです。うまく断れないのは結婚式に出席する意味の判断ができないからで、「彼女」が気を悪くすることを怖れるというのは判断を「彼女」のせいにする他責思考だと思います。

なぜ「僕」がこのような態度を取るようになったか、という理由は小説の中には示されていませんが、村上春樹初期作品のいわゆる「デタッチメント」の副作用かもしれません。

4) 儀式は意味（に裏打ちされた記号や言葉）のかたまり

この小説の舞台は、ホテルで執り行われる割と畏まった結婚式（というか結婚披露宴）ですが、結婚式に限らずカッチリした祝宴では冒頭に延々とお偉方のスピーチが続くのが常なので、特に若い人にとって退屈なのはよく理解できます。

しかし、一見定型的な儀式であってもその細かいバリエーションに気付いて企画実行者の気持ちに慮ったり、一見何気ない席次順・無難そうな言葉の選び方であってもそのバックグラウンドにあるもの（歴史的・社会的背景とか人間関係とか）を想像したり、といったことをしていると結構忙しいもの（らしい）です。

つまり、儀式というのは元来、意味（に裏打ちされた記号や言葉）のかたまりで、意味に濃淡はあるにせよその意味をどう汲み取るかはその人次第、だと思うのです。ですから、記号や言葉の裏にある意味を拾うことが出来ない「僕」にとって、結婚式が「ぜんぜん好きではない」のはもともとで、以下のような寒々しい描写が連続します。

⑤ 冒頭、「僕」が居眠りしてスプーンをスプーン皿に落とした音が響き渡り、周囲に見咎められる。（冷たい静寂）

⑥ 「誰かが誰にも聞いてもらえない見込みのないスピーチを延々と続けていた。」

⑦ 「大人しそうな中年のピアノ教師」の語る新婦のエピソード。（多分退屈）

「僕」は結婚式だけではなく、葬式や法事その他の儀式全般が苦手に違いないのですが、死に絡む葬式などは取り扱いが難しいので、その点結婚式ならまだ変な話として許容されるギリギリのラインに置けるという小説設計上の意図もありそうです。

5) 希薄化した現実に「白いガス体」＝「意識の切断インターフェイス」が出現する

誰しも意味の薄い儀式に渋々参加せざるを得ないこともあると思いますが、普通そんな時には心の中で何らかの抵抗や逃避をするものです。例えば、話を聞かず仕事や遊びの計画を練ったり、ひたすら好きな音楽や映画を脳内再生したり、といったことです。そこには「この話を聴くことは自分にとって無意味だ（もっと有意義なことが他にある）」という判断があります。

しかし3) で見た通り「僕」は判断が出来ない（という設計になっている）ので、抵抗や逃避といった脳内行動をとることが出来ません。そのため抵抗が「眠り」＝「意識の切断」とい

う極小の形で現れ、しかも他責思考なので「眠り」が「白いガス体」＝「意識の切断インターフェイス」として外在化し「僕」を誘惑する、と解釈すると筋が通るのではないのでしょうか。

6) 「僕」は身体感覚によってのみ現実世界につながり止められている

「僕」が意味によって現実世界とつながることが出来ないのなら、どのようにして現実世界とつながっているのでしょうか。それは、「僕」の覚醒条件を調べることによって明らかになると思います。具体的には、結婚式の間でも生々しい身体感覚によって「僕」の覚醒レベルが上がる箇所が2つあります。

⑧ (=③) 「彼女」に顔をじっと見られ、あきらめて食事を再開し牡蠣のグラタンを口にしていたとき「古代生物のような味のする牡蠣だった。牡蠣を食べているうちに僕は見事な翼手竜になってあっという間に原始林を飛び越え、荒涼とした地表を冷ややかに見降ろした。」

→視覚、味覚

⑨ 「彼女の小さな手が僕の手の甲に触れ、微かなコロンの香りがした。彼女の細いまっすぐな髪が僕の頬を撫でた。僕ははじかれたように目を覚ました。『もう少しで終わるから我慢して。お願い』耳もとで彼女がそう言った。彼女は胸の形がくつきりとめだつ、白いシルクのワンピースをきちんと着こなしていた。」

→触覚、嗅覚、聴覚・視覚（幾分性的な）

これらの描写より、「僕」は身体感覚によって覚醒し現実世界につながり止められる、と考えられるのではないかと思います。

また小説のラストで、結婚式が終わり眠気の飛んだ「僕」は彼女に「ホテルのプールで泳ぎたい」と言います。プールで泳ぎたい＝原初的な身体感覚に浸りたい、ということなのでしょうから、ここにも「僕」の身体感覚依存が現れていると思います。

7) 読後感：わずかな解放感と、漂う生ぬるい「袋小路」感

ラストの場面「日曜日の午後で、ホテルのロビーは結婚式の客やら家族づれやらでごった返していた。」という描写は、堅苦しい結婚式場を出て、賑やかなで無秩序な雑踏に混じったときの「僕」の解放感がよく表れていると思います。

しかし、「儀式も何とか通過できて、そのあとは彼女がご褒美に一緒にプールに行ってくれて、良かったね」という話でもないようです。

「僕」の抵抗は抵抗になっておらず、パソコンがフリーズするみたいに接続が切れる＝「眠り」という形を取るだけです。判断を徹底して避けるのは一見気楽そうではありますが、その代償として「眠り」という生ぬるい袋小路に落ちるだけで、そこから脱出する糸口は全く見えません。

この「抵抗が極小化される」袋小路の閉塞感は、短編集「カンガルー日和」内の「スパゲティの年に」と幾分共通するものがあると思います。「スパゲティの年に」も、主人公が巣ごもりしてひたすらスパゲティを茹でているお話でした。「眠い」もまた、一種の巣ごもり状態としての「眠り」を寓話的に描いた作品ではないかと思います。

「眠い」村上春樹 を読んで

2026年2月10日

田中克典

今、私は、人生の終末に確実に近づいている。そんな私もこれまでの人生で様々な出来事に遭遇してきた。無意味極まりない出会いも数多くあった。そんなときどうしたのだろうか。逃げ出す、無視する、ひたすら我慢して耐える…。

この物語は、そんな場面を、「眠く」なることで乗り切っていく「僕」の物語である。そして、そこには「卵型の白いガス体」という不思議なナビゲーターが付きまとう。

舞台は、僕の彼女の友人（女性）の結婚式。そこに、彼女から「強引に」（僕からみれば）誘われて出席した僕。時間と心の流れは、運ばれてくる料理の描写とともに描かれている。

コーン・ポタージュスープ。卵型の白いガス体が浮かんでくる。眠気が増す。英語の綴りで眠気に対抗しようとする。心の中での結婚式への嫌悪感（コンプレックスではない！）の吐露（言い訳？）。

サラダとパン。生まれて初めてののような強い眠さ。

牡蠣（古代生物のような味のする）のグラタン。披露宴会場は、荒涼とした地表となっている。

ステーキ。白いガス体が語りかけてくる。彼女についての魅惑的描写で僕の彼女への思いが描かれている。その彼女に、僕の結婚式と眠気への思い、この結婚式に出席した言い訳を語る。

グラスのワイン。僕の眠気についての彼女の受け留めが語られる。僕の結婚式へのコンプレックスではないか？僕は、自分が見る変な夢を話す。登場するのは白熊と僕とペンギン。他方で、彼女の結婚（僕との）に対する思いも想像させる。彼女にとって「子供で居続けたい」ように見える僕に対する愛おしさ？

シャーベットとコーヒー。結婚式は終わりに近づいている。彼女はどこかホッとした状態か。白いガス体は、いつも（これまでの結婚式）と同じように消えてしまっている。

ケーキの箱。僕の眠気はどこかに吹き飛んでしまっている。コンプレックス？大人になりにたくない（子どもで居続けたい）？違う、ただ眠いだけだったのだ。

眠気の消えた僕は、彼女を泳ぎに誘い、彼女に眠気に対抗しようとした英語の綴りを問いかけるが、彼女はそっけない対応。そんな彼女は首筋に素敵なコロンの香り。

僕の眠気の正体は何なのか？結婚式になると必ず生じるという。もともと結婚式は好きではないという。つまり、これまでも何度も結婚式に出席して、そのたびにこのような眠気に襲われている、ということ。ではなぜ、好きでもない結婚式に眠気に襲われながら出席するのか？多額の祝儀という出費も伴うだろうに。今回の場合は、断ったら彼女が気を悪くすると思ったから、出席した。

卵型の白いガス体の正体は何か？ガス体は、結婚式が始まるとほどなく現れ、終了間際には消え去る。眠気の発信元、ナビゲーターのような存在にも思える。

結婚式最終盤で語られる「変な夢」の話。白熊とペンギンと僕。白熊と僕は、一緒に窓ガラスを割って歩く。しかし、その原因は、ペンギンがむりやり大きな緑色のそら豆を食べさせようとするから。白熊、ペンギン、窓ガラス、そら豆はそれぞれ何を意味するのか？眠気となんらかのつながりがあるのは間違いないであろうが。

このように考えてくると、なんとも理解に苦しむ物語である。「ただ、眠りたいだけ」の僕、しかし、それは「結婚式」に出席した時間だけのこと。このことと奇妙な夢の話はどうつながるのか。

視点を変えて考えてみよう。彼が眠くなるのは結婚式だけだという、彼にとっての結婚式とはどういう位置づけなのか？ どうみてもポジティブな受け留めは感じられない。眠くなるということはどういうことか？ 人として、現実社会の中で、全く意識、認識の対象となし得ない、他の動作（無視する、黙々と料理を食べ、酒を飲むなど）での対応もできないほど無意味なもの、起きていて体が耐えられないほどたいくつなもの、せいぜい夢の中で遭遇していればいいようなもの、だから、決まって眠くなる、ということか？そして、その儀式が終われば、その眠気は完全に取払われる、ということなのではないか。僕にとっては、結婚式はそんなセレモニーの象徴なのではないか。そして、そのセレモニーへの夢先案内人（ナビゲーター）が白いガス体なのではないか。そんなものを私たち誰もが持っているのではないだろうか。

私たちが暮らす社会の中で様々なセレモニーが繰り返される。そこには様々な「意義付け」がなされる。その多くは、自分勝手なものが多い。しかし、それにもかかわらず、多くの人がそのセレモニーに付き合わされる。そして、彼らは、自分なりにそのセレモニーとの付き合いを「上手く」こなしていく。ある意味、そのような関係で世間は成り立っているようにも思われる。

しかし、どうにも対応することが耐えられないセレモニーが誰にも在るのではないか。また、在って当たり前なのではないか。主体的に生きようとするならば、在って当然ではないだろうか。そんなセレモニーに遭遇したとき、どのような対応をするのか？その対応の一つとして「眠くなる」という状況が描かれているのではないか。それでもそれは、それほど悲観的には描かれてはいない。僕は、眠くなりながらも英語の綴りを考えながら周りに配慮しようとしている。また、そのセレモニーから解放されれば日常生活に戻っていけるのである。そのような僕を周りもしっかり受け止めてくれる。

奇妙な夢の話をもう一度考えてみよう。この夢は、動物園の中の風景ではないか。白熊、ペンギン、そして僕は動物園の窓ガラスのなかにおいて、窓ガラスに向こうには観客がいる。窓ガラスは、我々の深層に潜むストレスの象徴を描いているのではないか。「ものすごく大きな緑色のそら豆」は餌ではなく、無意味なもの象徴ではないか。

この物語は、人間社会に潜む様々な諸事相に対する深層心理を、結婚式という一見誰もが普通に受け留めるようなセレモニーを題材として描こうとしたのではないだろうか。結婚式を全く無意味で受け入れることのできない僕、他方で、それを何とか受け入れようとして無理やり英語の綴りに拘ろうとするが、僕の彼女にとっては、そのことの方が全く受け入れられないのである。でも、そんなことの不思議な組み合わせで人間社会は出来上がっていく、そんな社会現象を少し暖かい視線で描いた物語ではないか。

もう一つ大切なことを忘れていた。僕にとって無意味なこと、眠くなるようなつまらないことでも、それがあから新しい発見、より素晴らしい出会いも生まれるということなのだ。すなわち、結婚式の途中では、微かなコロンの香りしか感じなかった彼女から、式が終われば、「素敵なコロンの香り」を感じ取れたのである。

そうはいっても、なんとも分かりにくい物語である。そんな物語についてレポートを書くということへのストレスと好奇心をおもしろがっている私がいることも事実である。さて、はたして、私の拙いレポートを目にした誰かが、この物語を読んでみようと思うだろうか？いや、こんなも読んでみただけかもしれない。

以上

村上春樹『眠い』論

——規範と身体の間で揺られる生——

唐 露

序論

村上春樹の短編小説『眠い』は、単なる肉体的な疲れや一時的な落ち込みを描いた作品ではない。この小説は、主人公に理由もなく突然襲ってくる強い眠気を軸に、現代社会に生きる個人が抱える内面的な苦境一生の底から湧き上がる、はっきりと言葉にできない疲労と疎外感を描き出している。

人間は誰しも、「真に自分らしく生きたい」と願い、「自分が確かに生きている」という実感を追い求めている。しかし、我々はいつの間にか社会秩序や儀式、「こうあるべき」という規範に囲まれ、「立派でなければならない」「期待に応えなければならない」と自らを縛るようになる。こうした規範に従う過程で、自らの「身体」の語り——本来の衝動や直感——を抑圧して、次第に自らの内面と遠ざかってしまい、理由もないのに消えない、深い疲れを生み出す。

この小説の際立つ点は、主人公が「眠気」に理由付けたり、無理に立ち直ろうとしたりせず、ただありのままに受け入れる姿にある。それは現実逃避でも、安易な自己和解でもない。主人公自身に明確な自覚や意思はなくとも、「眠り」を通じて規範や秩序の世界から無意識的に距離をとり、自己本来の「身体の世界」における「醒め」——「自分が生きている実感」——を守ろうとする無意識の動きがそこに現れている。これは、村上春樹が描く現代人の最も真実な生存の姿なのである。

一、理由なき眠気—根源的な疲れの具象化と規範世界への拒否

主人公の眠気は、肉体的な消耗や精神的な落ち込みに由来するものではない。作品にはこう記されている。

「どうしてかは自分でもよくわけがわからないけど、とてつもなく眠くなるんだよ。わけがわからないくらい眠くなるんだ。結婚式に出ると。これまで居眠りをしなかった結婚式がひとつもないんだ。」

「ちゃんと寝たさ。九時間も寝た。嘘じゃないよ。」

「コンプレックス？大人になりたくない？違うな、と僕は思った。僕はただ眠いだけなんだ。」

この眠気は理由もなく突然訪れるものであり、心の奥底に蓄積された疲労そのものの具象化と

言える。同時に、主人公が眠気に襲われた時、「卵型の白い気体がぼっかりと浮かんでいる」ように見えたという抽象的なイメージは、言葉にできない内面の混沌と疎外感を芸術的手法で視覚化したものである。

この眠気が彼女の友人の「結婚式」で起こったことは、深い意味を持つ。「結婚式」は社会秩序と因習が凝縮された、高度に儀式化された空間である。言動様式、他人への対応、演じる役割に至るまで「こうあるべき」と規定され、人に演技を強いる場面である。主人公の眠気は、この「演じる」世界に対する「身体」の本能的な拒絶と解釈できると思われる。頭が秩序や規範を守るべきだと理解する前に、身体は直感的に「巻き込まれたくない、消耗したくない」と反応し、「深い眠り」によって自らをこの空間から切り離す。この理由なき眠気は、現代人が周囲の規則に従うことで生じる疎外感を反映しており、心の奥底で「ここには私の居場所がない」と訴える信号に他ならない。

二、規範の中の眠りと身体の中の醒め——二つの世界の対立構造

主人公の生きようは、「規範の世界で眠り」と「身体の世界で醒め」という矛盾対立によって特徴づけられる。『眠い』におけるこの対立は、単なる体験の描写を超え、現代人の生存様式そのものを象徴している。

作品の中で、結婚式はこの構造を最も鮮明に示す場面である。主人公は「これまで居眠りをしなかった結婚式がひとつもないんだ」、「彼女（花嫁：引用者）のことをろくに覚えてもいなかった」「誰かが誰にも聞いてもらえる見込みのないスピーチを延々と続けていた」と記されている。結婚式は「こうあるべき」という規範に縛られた空間であり、結婚式の中で、主人公の意識は眠りに落ち、記憶は極めて希薄なものとなる。これが「規範の世界における心の眠り」である。

一方、規範と無関係な身体的な知覚に対しては、意識は異常に明晰となる。

主人公は彼女の「コロンの香り」がくっきりとおぼえている。それに「彼女の小さな手が僕の手に触れ」「彼女の細いまっすぐ髪が僕の頬を撫でた」「古代生物のような味のする牡蠣」といった身体的な知覚や感覚に訴える事柄に対して、主人公は異様に覚醒しており、心に深く刻まれている。

これらは、社会的な役割や規範とは無関係の、直接的な身体感覚によって支えられている。結婚式という儀式空間では意識が眠り、かすかな香りや原始的な味、イメージだけに鮮やかに醒めている。これらの小さくて個人的な、偽れない感覚こそが、彼に「生きている」と実感させる真実の接点である。演技だらけの世界では眠り、真実だけに醒める。この対比が、本作の核心的な構造であるように思われる。

この対比は、現代人の生き方の歪みを象徴的に描き出している。現代人は生きていくために社会の秩序や規範に従わざるを得ず、「こうあるべき」「他人の期待に応えるべき」という束縛のもと、自らの身体や直感を抑圧し、「規範の世界」に入り込もうと努力する。しかしこの過

程で、人間は次第に「自分が生きている実感」から遠ざかり、心の居場所のない漂流感が生まれ、最終的に「規範の世界」の中で「心が眠る」状態に陥る。主人公に宿る二つの世界の衝突は、まさに現代社会の個人が直面する生存状況を映し出す鏡である。

三、真実の接点——身体感覚による自己存在の確認

第二節で明らかにした「意識の眠り」と「身体の覚醒」の対立を踏まえ、本章では、なぜ身体感覚だけが「真実」たりうるのか、その存在論的な意義を明らかにする。

結婚式という混沌とした儀式のなかで、主人公が確かなものとして捉え直すのは、「コロンの香り」、「牡蠣の味」、「白いシルクのワンピースをきちんと着こなしていた」彼女といったイメージである。これらには共通した特質がある。それは、社会的な規範や価値観によって規定されるものではなく、主観的で、かつ欺くことのできない「身体的」な真実性に根ざしている点である。

「コロンの香り」は言葉を超えた直接的な接点であり、「牡蠣の味」は現代文明や常識を超えた「原始的」な味わいである。夢の中で一緒に窓ガラス（社会的規範や束縛）を割って歩く仲間として出場した「白熊」のイメージは、彼女の「コロンの香り」や「触り」によって強い眠気から目を覚めたとき、主人公の目に映した「白いシルクのワンピースをきちんと着こなしていた」彼女のイメージと重なっている。「白熊」と「白いシルクのワンピースをきちんと着こなしていた」と重なった彼女のイメージは、世俗的な秩序によって汚されることのない、理想的な花嫁姿であり、主人公の純粋的な自己の願望でもある。これらはいずれも、社会的規範や因習とは無関係に、「自分が今ここに生きている」という実感を与える。

村上春樹はこの描写を通じて、現代人が存在そのものの「虚無」や「無意味さ」に触れたとき、自己の存在を確かめられる唯一の拠り所が、社会的な成功や規範の遵守ではなく、むしろ些細で捉えがたい身体感覚のなかにこそ存在することを示している。「規範の世界」がもたらす疎外感と空洞化のなかで、こうした小さな身体的な「接点」が、自己を支える最後の拠り所となるのである。

四、規範への執着と精神の葛藤——英単語のスペリングと変な夢の象徴

主人公が身体感覚によって真実を捉えようとする一方で、社会的秩序や規範への適応を放棄できない矛盾は、英単語の「スペリング」へのこだわりと、「変な夢」の表象としていっそう鮮明に展開する。本章では、外的な適応と内的な分裂の関係を解明する。

(一)、英単語のスペリング—規範への適応と心の分裂

英単語のスペリングには厳格な規則が存在し、絶対的な「正解」が約束される。これは、社

会規範そのものの比喩と言える。主人公は英単語のスペリングに非常に興味を持ち、「昔から漢字の書き取りとスペリング・テストは得意なのだ。いつもクラスで一番だった。暇があれば辞書ばかり読んでいた」と自覚している。これは彼が社会の枠組みのなかで「正しく生きる」能力を持ち、外的には秩序や規範に適応していることを示す。

しかし、「正解」や「正しさ」への執着は、心の分裂を増幅させる。秩序に適応すればするほど、正解の存在しない感情・身体感覚・生きる実感から乖離してしまい、孤独と空洞感が深まる。外的には順応した人間として振る舞いながら、内面では自己から切り離される一方である——この分裂こそが、主人公を襲う理由なき眠気と疲労の根源なのである。

(二)、変な夢の表象—身体感覚と規範的圧力の対立

夢は、意識下に抑圧された葛藤が表象化された領域であり、作品に登場する夢は主人公の内面を鮮明に映し出している。

「白熊と一緒に窓ガラスを割って歩く夢なんだよ。でも本当はペンギンが悪いんだ。ペンギンが僕と白熊にむりやりそら豆を食べさせるんだ。それもものすごく大きな緑色のそら豆で……」

このような夢のイメージは、それぞれに明確な象徴的な意味を持っている。「白熊と一緒に窓ガラスを割って歩く」様子は、抑圧された自己が身体感覚に従う自由な存在となり、規範の束縛から逃れ出ようとする願望の表れである。「ペンギン」は理不尽な社会的規範と外界からの圧力を象徴し、「無理やり食べさせられる大きな緑色のそら豆」は、無辜であるにもかかわらず規範的な圧力によって負担を強いられ、自己が歪められる現実を描いたものと解釈できるように思われる。

夢のなかに展開するこうした対立は、そのまま主人公の内面葛藤であり、真に自分らしく生きたいと願いながらも、社会的な規範と期待から逃れられず、むりやり枠組みに押し込められる。この矛盾が、『眠い』における身体と規範の衝突を最も劇的に示している。

五、眠気への眼差しと生の語り——規範と身体が共存する矛盾の人間像

主人公が「眠気」に対して示す態度は、自らの身体感覚にありのままの状態に眼差しを向ける姿にほかならない。彼は眠気を抑え込んだり、理由を問い詰めたりすることなく、自らの内側から湧き上がる感覚を否定せず、そのまま受け止め続ける。この姿勢は、無関心でも諦めではなく、自らの根底から湧き上がる「身体」の語りに静かに耳を傾け、外界の価値に流されず、自らのありようや生きる実感を守ろうとする態度である。

だが、彼は、身体感覚に素直である一方で、外界の規範から離れているわけでは決してない。

英単語のスペリングを意識する姿からも明らかなように、社会が求める規範に応え従う能力を持ち、日常的に規範の中で生きている。「身体」の語りを無視せず、かといって規範を拒否もせず、二つの相反する方向に従いながら生きる。この矛盾した在り方こそが、人間の現実そのものである。主人公の生の語りが、この矛盾をそのまま映し出しているのである。

この姿の奥には、人間としての深い内実と、解けることのない根源的な矛盾が横たわっている。人間は誰しも、自己の存在を確かめたいという渴望を抱えながら、世界や存在の「虚無」や無意味さをも感じている。絶対的な真実も意味もないことを知りながら、それでもなお真実や意味を追い求め、自己の存在を確かめずにはいられない。理解しながらも求め続けるこの揺れ、「虚無」を知りながらも「実感」を追い求める葛藤こそが、人間の本質的なあり方なのである。

主人公は、規範に生きながらも身体感覚を見捨てず、身体に従いながらも規範から離脱しない。二つの相反する軸の上で自らの在り方を保ち——それゆえに無限の悩みと不安が生じるが——、自らの矛盾を生の語りとして受け止めている。彼の姿には、善悪や価値判断を超えた、人間の矛盾がそのまま映し出されている。規範と身体、両方に従いながら生きる矛盾。虚無を感じながらも自己を求め、矛盾を抱えながらも生の実感を拾い続ける在り方である。これこそが、人間のリアリティに触れているのではなからうか。

結論

本論では、『眠い』に描かれる「規範の世界」と「身体の世界」の対立をたどり、主人公の「眠気」が社会的な規範と自己の内面の間にも生まれた歪みであることを明らかにしてきた。しかし作品の真の意義は、そうした対立を解消することでも、明快な答えに到達することでもない。矛盾を抱え続けて生きる人間の在り方そのものにこそ存在するのである。

主人公は眠気に対してありのまま眼差しを向け続ける。これは現実逃避ではなく、身体感覚に従い、内面の揺れや矛盾を静かに見つめ続ける生の語りである。彼は規範を無視するのではなく、規範に応え従う能力を持ちながら生き、同時に「身体」の語りからも離れることができない。主人公自身に迷いや自覚的な悩みはなくとも、人間は誰しも矛盾の中で揺れ続ける存在であり、彼の姿はその普遍的な人間のあり方を表している。

人間は誰しも、世界の虚無を感じながら生の実感を求め、意味がないと知りながらも自らの在り方を確かめずにはいられない。解決されることのない矛盾、答えの見えない揺れ、そのままの自分を受け入れるしかない在り方——それらは、主人公に自覚がなくとも、人間の内面に静かに宿る根源的な姿なのだ。

『眠い』が描き出すのは、矛盾を乗り越えた人間でも、明確な生き方を持つ人物でもない。自覚のないまま矛盾を抱え、身体感覚を頼りに静かに生き続ける人間の姿である。規範と身体、外界と内面、虚無と実感、融和することも収まることもなく、人間の根源で揺れ続ける。主人公の「眠気」への眼差しと「身体」の語りは、答えを持たず、矛盾を抱えたまま生きること

こそ人間の真実であると、淡々で、しかし確かに描き出しているのであり、現代人の生き方の核心に触れているのである。

「眠い」とは別の仕方で

大藤 渉

言葉の2つのレベル

言葉は何かを分ける働きをもっている。その言葉を2つのレベルに分けて考えてみたい。1つは、経験的なレベルの言葉である。たとえば、「嬉しい」、「耐え難い」といった言葉である。こうした言葉は、身に起こったことに対応するかたちで使われる。もう1つは、ある経験が成り立つ仕組みを表す言葉である。このレベルの言葉は、「嬉しい」というときに身に起こっていることが、どのようにして生じているかを表すために使われる。「嬉しい」という感情がある人において感じられるときには、それを浮かび上がらせる物事の配置がある。たとえば、ある人の「恋人」が「指輪」を「海辺」で渡すとき、「嬉しい」という感情が生じるとする。このとき、「嬉しい」という感情は、「恋人」、「プレゼント」、「海辺」といった様々な要素が構成されて生じている。それらの構成要素はそれぞれ集合的なものの中におかれている。たとえば、「恋人」は、ある人の友人に関係する。「恋人」の友人にも関係するし、友人でない人にも関係している。そうした関係を取り巻く集合の中において「恋人」は構成されている。「指輪」も「海辺」も同様に、それ自体で存在しているのではなく、指輪に関する集合、あるいは景色に関する集合といった具合で様々な集合の中におかれている。こういうわけで、「嬉しい」という感情は、単に生じるものではない。それは、ある集合の中で生じる。後者のレベルから考えるならば、経験的なレベルでの言葉は、ある集合における配置が構成されることによって成り立っている。こうした構成要素を言葉として表し、配置を組み立てるときに使われるのが後者のレベルの言葉である。

このように言葉を分けることによって何が見えてくるのだろうか。この問いとともに、村上春樹の短編小説『眠い』を以下では読み解いてみたい。この小説では、「眠い」ということを、一方ではただ単にそうになっているだけだと言い、他方では「何かのコンプレックスよ」とある原因に還元しようとする立場が出てくる。だが、これらの考え方は、一方では意識的なレベルにおいて浮かんでくることだけを取り上げ、他方では「眠い」という結果をある単純な原因から説明しようとする点で、「眠い」ということが成立する仕組みを表すには不十分である。先に述べたように言葉を使い分けるならば、「眠い」ということは、むしろ、さまざまな構成要素が関係しあう集合の中で成り立っているといえるだろう。そうした集合を言葉にすることによって、ただ単に「眠い」という現状から抜け出す出口を探してみたい。

構成的な思考様式

『眠い』という小説は、「僕」の視点から見える世界が描かれている。読み手にまず見えてくるのは、「スープ」を飲みながら眠りはじめる「僕」の姿である。なぜかよくわからないが「僕」はすでに「眠い」。次に映し出されるのは、「スプーン」が「僕」の「手」を離れ、「食器のふち」にぶつかって「かなり大きな音」が立つシーンである。「スプーン」、「手」、「食器のふち」が関係することで、「かなり大きな音」が生じ、その「音」が「僕」において出て来る。「僕」は、周囲にいる「何人か」と関係し、隣の席の「彼女」とも関係している。「何人か」の「視線」、「彼女」の軽い「咳払い」が「僕」には感じられる。そのため、その人物たちがどのような状況におかれているのか読み手にはわからないが、「僕」はその

場をとりつくりうために「右の手のひら」を広げて、それを表に向けたり裏返したりして調べるふりをする。なぜなら、「何人か」の「視線」が「僕」において見えたからである。もし「視線」を感じる事がなければ、すなわち、「視線」が「僕」の構成要素にならなければ、「僕」はそのような演技をしなかったにちがいない。「僕」のある行為は、「僕」を取り巻くあらゆる構成要素と関係することによって生じている。もちろん、「僕」と関係していないという仕方に関係する構成要素にも繋がっている。

「僕」は、ぼんやりとしびれを感じる「頭」とつながる。そして、「卵型の白いガス体」が見えてくる。その「ガス体」は「いいよ、いいよ、もう我慢してないで寝ちゃおうよ」と囁きかけてくる。この「ガス体」は「僕」にとって幻影や幻覚といった類のものではない。ほんとうに見えている。「ガス体」は、他の人々にとっても一様に認識されるものではなく、「僕」において構成されることによってつくりだされるものである。「ガス体」に限らず、「視線」であれ「スープ」であれ、ある要素は、さまざまな要素の組み合わせによって成り立っている。一見、単純に見える物事はすべて、複雑な構成物である。「僕」において映し出されることがなければ、ある何かが「スープ」として見えてくることはないし、「コーン・ポタージュ」として飲まれることもない。たしかに、〈飲む〉という出来事が成り立つためには、「僕」と「スープ」との出会いがなければならない。しかし、ある液体を「僕」が「スープ」として思い出したり、「コーン・ポタージュ」として飲んだりする場合には、その液体は、「味噌汁」でも「牛乳」でもないものとして意識されている。つまり、この目の前の液体はそれ自体として意識されていない。ある液体はある集合の中で意識されている。ある集合の中におかれていることによって、「僕」にはある液体が「スープ」に見える。おそらく、あるスープが「スープ」として飲まれるのではなく、かけがえのないこのスープになるには、これまでの経験からつくりだされた言葉としての「スープ」を破るような出会いがなければならない。ただし、「僕」と「コーン・ポタージュ・スープ」との出会いは、眠気が覚めるような暴力性を帯びたものではなかった。その出会いは、「僕」に corn potage soup とつづらせる結果を生み出したが、それ以上のものではなかった。もしかするとそれは、他の人には、まったく異なるかたちで映し出されていたかもしれない。あるスープが、それ自体として、不味さや、辛さという性質をもっているわけではない。辛いスープだから、それを飲むときに辛いと感じるわけではない。ある出会いにおいて、不味さや、辛さが感じられる。そういうわけで、同じようなものであっても、あるときは辛く感じられ、あるときは甘く感じることもある。いずれにせよ、「スープ」との出会いは「僕」の眠気を覚ますには至らない。

スペリングがむずかしそうな単語と繋がることで「僕」は「眠い」という結果を打ち消そうとする。彼女に尋ねると「ミシシッピ」と言われる。Mississippi は、s が4つ、i が4つ、p が2つ、そしてM が1つで構成されている。それは、「僕」にとって奇妙な単語だが、眠気は依然として続く。他の単語を彼女に尋ねるが、彼女は、「黙って食べなさい」と言う。「僕」の「すごく眠いんだ」というヘルプに対しては、「わかっているけどお願いだから眠らないでね」と返す。彼女は、「眠い」という結果を生み出す構成要素の関係を組み換えようとはしない。しかし同時に、「眠い」という結果を否定する。彼女は、「僕」をつくりあげている諸要素の関係性に無頓着である。だが、結果だけは真っ当な仕方生きるように強いてくる。やれやれ。

このままでは「僕」が寝てしまうと思ったのか、「ヨークシャー・テリア」と彼女が突然言った。「僕」は何のことだかわかるまでにちょっと時間がかかった。「ヨークシャー・テリ

ア」を「・」を用いて繋ぎ合わせることで「Y・O・R・K・S・H・I・R・E T・E・R・R・I・E・R」と構成するように、「わかる」ということも様々な要素を構成することで成り立っている。だから、「わかる」までには多少の時間がかかる。さらに、構成にあたっては様々な仕方がある。そういうわけで、「わかる」ということはいつも遅れてやってくる。「僕」が何かを「わかる」のではなく、「わかる」ということが「僕」において到来するからである。「わかる」ということははっきりと意識しうる単純な結果であるが、「わかる」ということを成り立たせている構成要素の諸関係はどこまでもわからない。それはとても複雑である。もっとも、その構成要素の諸関係を言葉で考えうるとする立場に対して、それを言葉で言い表すこと自体が「無意識」や「存在それ自体」といった言語以前の領域によって成り立っているのではないかと問いたくなるかもしれない。こうした問いに対しては、次のように応答したい。たしかに、「眠い」という経験的な出来事は、「無意識」や「存在それ自体」といった言語以前から生み出された結果である。だからこそ、「眠い」という経験的な出来事が、いかにして「無意識」や「存在それ自体」において生み出されているのかを問う必要があるではないか。その仕組みを問題にするならば、それがどのような要素から出来あがっているのか、それぞれはどのような働きをしているのか、その働きはどのように影響しあっているのか、といったことを言葉にしようとしなければならない。このような問題は、「眠い」の仕組みを成立させている構成要素の一つひとつを言葉にしつつ、それらの言葉同士を繋ぎ合わせ、その諸関係の働きの結果として「眠い」という出来事をつくりあげることを要請する。そこで行われることはまるで、技師が精巧な部品を組み合わせることで一つの機械を作るかのようである。こうした言わば構成的な思考様式は、「ミシシッピ」や「ヨークシャー・テリア」を前にした「僕」の考え方と変わらない。

しかしながら、彼女の考え方はまったく異なる。彼女は、ある原因、あるいはある結果の想定を根拠にして思考する。ある場面では、「眠らない」という結果を想定して、その想定が実現すれば睡眠時間という「ご褒美」を与えようとする。別の場面では、眠くなる原因を色々想定して、「僕」を責め立てる。「僕」が再び眠り始めると、彼女は「パンプス」の先で「僕」の「くるぶし」を蹴る。たしかに、一時的には効果がある。だがその効果が持続することはない。というのも、ずいぶん長いみちのりを辿ってここまでやってきた、という感じの「パン」、誰かが誰にも聞いてもらえる見込みのない「スピーチ」、自身の友だちではない人の「結婚式」、そういった「僕」にとって関心が向かない物事としか繋がることができなからである。古代生物のような味のする「牡蠣」は、「僕」を「見事な翼手竜」に変身させ、荒涼とした地表を冷ややかに見下す視座を与えてくれる。しかし、地表では依然として「僕」には何の関心ももたらさない光景が、すなわち「大人しそうな中年のピアノ教師」が新婦についての思い出を語るという光景が広がっている。その光景は、「僕」に「ふうん」という思いしか抱かせない。彼女にとって、新婦は「立派な人」に見えるかもしれないが、「僕」にとっては、「ただ単にろくに覚えていない人」である。つまり、「僕」を構成する要素からは抜け落ちている。

「眠い」原因を追及してくる彼女に対して、「僕」は何度も「ただ今は眠いだけなんだ」、「眠いだけなんだ」と言う。結婚式の場で孤立した気分になる「僕」の目の前に見えるのは「白いガス体」である。それは「僕」に眠りに誘うかのように語りかけてくる。その時、彼女の小さな「手」が「僕」の「手の甲」に触れ、微かな「コロンの香り」がする。彼女の「髪」が「僕」の「頬」を撫でる。その繋がりによって「僕」は目を覚ました。どうやら、「僕」において「眠い」とは別の結果を生み出すためには、「コロンの香り」や「手」と

「手」の接触が効果的であるらしい。たしかに「僕」に意識されうるのは「誰かの結婚式に出るたびに眠くなるんだよ」ということである。「眠い」という結果はあとからはっきり意識できるが、それがなぜそうなるのかは人間の意識ではどこまでも理解しがたい。そのため、「僕」は彼女に対して、次のように言うしかない。「どうしてかは自分でもよくわからないけど、とてつもなく眠くなるんだよ。わけがわからないくらい眠くなるんだ。結婚式に出ると。これまで居眠りをしなかった結婚式がひとつもないんだ」。

超越的な思考様式

もともと彼女にとっては、こうした話の方が「僕」にとって想像された作り話に見える。結婚式で眠くなるのが「何かのコンプレックス」や「復讐」によって引き起こされると考えることのほうが本当の話に見える。そうした原因をでっちあげて「僕」を断罪すること、これが彼女の考え方である。それは、経験的な出来事を、経験から切り離されたところで前提として置かれた原因から考えようとする点で、超越的な思考様式といえる。こうした考え方からつくりだされる言葉は、3つ目のレベルにある。それは、超越的なレベルの言葉である。超越的なレベルで措定された原因から法と裁判所が出来上がり、そこで審判が下る。このようにして超越的な思考様式は、ある対象を解釈することで八つ裂きにしようとする。たとえば、「あなた、本当は結婚したいんじゃないの?」というように。

こうした判決に対して、「僕」はユーモアで対抗する。裁判官の位置につく彼女は、居眠りをするという経験的な出来事を潜在的願望によってもたらされる復讐行為だと解釈する。被告人である「僕」は、「地下鉄に乗るたびに居眠りをする人はどうなる?炭鉱夫願望なのか?」と応答する。ある場での居眠りがその場への願望を表すという法が適用されるならば、地下鉄という場での居眠りは炭鉱夫になるといってもよいのかと問う。ユーモアは、ある原理を無際限に拡大し適用することによって、法の転倒を目指す営みである。ただし、裁判官がそれに取り合うことがなければ、法は維持され続ける。そして、裁判官は被告人に対して様々な法をもって判決を下す。たとえば、「あなたはいつまでも子供でいたいよ」というように。裁判所は、裁判官の気がすんだとき、すなわち、理解した気になったときに閉廷する。

現在とは別の仕方

「シャーベット」、「エスプレッソ・コーヒー」、「彼女のコーヒー」、「煙草」、「あくび」などの無数の構成要素と繋がっているうちに、気がついたら「白いガス体」は「僕」の構成要素から消えていた。そのことによって、眠気はどこかに吹き飛んでしまった。それを言葉にするとき、「白いガス体」と繋がることによって、「僕」において「眠い」という結果が生じていたことが明らかになる。「白いガス体」は「結婚式」と連関しており、式の開始とともにやってきて、終了とともに消えてしまう。このことは、「僕」にとって、仕方のないことであり、それを生み出す原因が他にあるわけでもない。「僕」にとっては、ただ「眠い」だけである。

どのようにすれば別の仕方を感じ、別の仕方で見え、別の仕方でも思考しうるようになるのか。それは、超越的な思考様式ではなされえない。たしかに、この考え方はある時点までは別の仕方でも生きることを要請するかもしれない。だがそれは、此方に対する彼方のような到達点を暗黙の前提とし、そこから離れたものを否定すると同時に、彼方へ向かうように存在の仕方を矯正する限りのことである。こうした思考様式は、最終的に多数多様なものを一

様に統一し、ある理想に従属させてしまう。他方で、構成的な思考様式は、あらゆる経験的な出来事を肯定し、その上である経験を成り立たせている構成要素の配置を問う。もし目の前に見える景色が、耐え難いものであればあるほど、その問いは切実なものになる。なぜこうなってしまうのかという問いは、目指すべき理想像を問題にするのではなく、そのようにさせる現在の状況を問題として発されなければならない。つまり、悲惨な状況においては、日常の耐え難さを生み出す集団的なものの配置を問わなければならない。現在の状況を問題化する問いによって、その状況を意識すること、現状の配置を組み換えること、新しい構成要素を組み込むこと。こうした現状への抵抗によって、別の仕方で感じ、別の仕方で見られ、別の仕方でも思考しうるようになる。「僕」にとって「眠い」とは別の仕方では生きるためには、「コロンの香り」を「僕」に差し込むだけで十分である。だが、「結婚式」の働きがもたらす現状には抵抗しえていない。たしかに、「眠い」というのは一つの抵抗の仕方ではあるが、その働き自体に歯止めをかけることはできていない。「ただ眠いだけ」と言っているだけでは、自身が何に抗っているのかわからないままである。だが、悲惨な現状の只中において、他にどのような抵抗の形態がありうるだろうか。現状に順応することなく自らのあるがままに生きるという以外の抵抗がありうるだろうか。もしそれが現状への抵抗として機能しなくなった場合、新たな抵抗の形態を生み出す余力は残っているだろうか。いったいどうすれば集合的なものが生み出す働きに抗うことができるのだろうか。

何はともあれ、「結婚式」が過ぎ去ると、別の何かとの繋がりが生まれる。「プール」、「水着」、「日曜日の午後」といった構成要素と連繋しはじめる。もちろん、経験的な出来事がいかにして構成されているかについて知ろうとすることは、彼女にとって何の得にも感じられず、どうでもよいことである。現状がいかにしてこの有り様なのかを考えるのではなく、この有り様の価値や、現状をどこに向かわせるかを考える方が彼女にとって重要なことである。それはまるで羊の群れを飼う牧人のような生き方である。他方、「僕」にとって重要なのは、「コロンの香り」と繋がり、それによって自身が満たされることによって「僕」になることである。もちろんこのようなかたちで言葉にすることは、経験した後になってはじめて語りうることである。こうした言葉は、彼女が発する言葉のように、他者の生き方を矯正するに足るだけの力をもっていない。だが、「僕」の身に何が起きているのかを言葉によって組み立て直すことは、「僕」の現状への従属はどのようなものなのかを経験的なレベルで確かめること、仕方がなかった生き方を別の仕方に変えること、次の瞬間に別様の景色が見えること、につながる。それは、耐え難い現状から抜け出す糸口となる。

そこに愛はあるのか？

岡部 昌平

村上春樹「眠い」が遂に映画化？

試みにこの短編を映画化してみたとき見えてくるものがないかと考えた。

場面はホテルの結婚披露宴で一場一幕。まず受付でまごまごしながら祝儀袋を渡している中年の招待客。その後ろには身なりを気にしながら順番を待っている初老の夫婦。男の礼服についた糸くずを奥さんがとってあげている。周囲では新郎新婦の友人たちが楽しそうに立ち話をしている……そこでカット。

場面が移り披露宴がはじまっている。いかにも挨拶が得意そうな男が得意満面に挨拶をしている。はやくも眠そうな主人公が新婦にちかいテーブルに座っている。

パロディ=披露宴

血縁やらなにやら新郎新婦をとりまく社会を凝縮したような披露宴で、主人公はその社会の外にあることをしきりに訴える。大衆化、パターン化した披露宴の陳腐で滑稽なマンネリズムへの拒絶が、白いガス体になって現れては消えるが、これを映像化するのは難しいので演技でカバーしてもらう。コース料理が時計係になっているところはそのまま。パロディが舞台になっている。

彼女のモニタージュ

「僕は」「彼女は」の繰り返しはト書きとセリフが混ざり合った台本のよう。パロディ化した披露宴を舞台に僕と彼女の掛け合いが続いていく。内容にはそれほど意味がなく、独白は説明的だから画面に吸収させてしまって構わない。彼女の小さな手、微かなコロンの香り、細いまっすぐな髪、胸の形、シルクのワンピースなど視覚と嗅覚で彼女がモニタージュされる。

ホテルのプールとどこか

版のことなる二作を比べたとき、決定的なちがいが「このホテルのプールで泳ぎたい」と「どこかに泳ぎにいかないか？」ではないか。このセリフは文字表現でのトランジション（転換）になっていて、水着は披露宴で着飾った彼女と対比をなしている。その場合「ホテルのプール」では披露宴を引きずっていて転換が不十分だと気付いたのではないか。「泳ぎにいかないか？」なら海だってあり得るし、海であればより対比がはっきりする。しかし映像で彼女を水着にしては安っぽいサービスカットになるので、あえて別のラストを考えてみた。

ラストシーン

披露宴が続いているなか主人公はぼんやり窓の外の海に目を向ける。海辺で戯れる少女のシルエット。カメラは午後の光でキラキラとまぶしい海をインビジブルに映しだして徐々に引いていく……そして披露宴会場にパンすると、正面に座っている新郎が主人公に変わっている。となりの新婦は彼女で、新婦の友人のテーブルには最初の場面で新婦だった女性が赤ちゃんを抱いて座っている。

ここで質問。貴方が監督なら、この最後のシーンで新郎の席に座っている主人公に眠そうな顔をさせますか？ それともごくあたりまえの新郎を演じさせますか？（もちろん後者です）

結婚とその祝宴の無限の繰り返しはいわば人類のタテ糸であり、その都度その都度の「彼と彼女」はヨコ糸なのかもしれない。時代が移り変わっても、その糸を織り上げているのは女性であり、そこに男のでる幕はなさそう。男には後ろも前もただ果てしない——のではないだろうか。

朝比奈逸人（あさひなやすと）「トンネルの唄」（1975年ごろ）

<https://www.youtube.com/watch?v=hPmAydvuc9g>

トンネルの唄は13分30秒から

村上春樹著『眠い』：読書感想文

『村上春樹の武士道』

Feb.14.'26 奈原伸雄

《はじめに》

村上春樹の『眠い』という作品は、すべての解説を拒否する。何を言っても『眠い』の一点張りであるから。そこで、仕方なく、この一見ふまじめな作品から、「武士道」という真逆の、この上なく潔い責任倫理のようなものを取り出してみることにした。論点は三つ。一つは、『結婚式』に出ては『眠くなる』という、普通ではあり得ない偶然が主人公の『僕』には「必然」であるという虚構。二つ目が、隣席の『彼女』から、心配そうに漂う『微かなコロンの香り』が、終わりには『素敵なコロンの香り』に変容しても、コロンはやはりコロンである質実な現実。

三つ目が、『眠い』という感覚は、深い「睡眠」への通路であり、かつ片方でゆるぎない「覚醒」に向かう自意識の中間領域であるという実存。小編ながら、本書には他にも論点は数限りなくありそうである。それなりの解釈を銜う心理家の鎌かけも、意味ありげな謎解きをそそのメタファーも縷々出没するが、これらは終盤に向かう『違うな、と僕は思った』の一撃で全否定される。従って、残る課題は、文学的真理が哲学的表現によって確保されることのみとなる(『』内はテキスト(村上春樹全作品 1979-1989⑤)版からの引用。「」と傍点と `、は筆者。以下同じ)。

◎ 「虹色の音楽」：P席にて

『眠い』という作品は、村上文学の分かりにくさを象徴しているかも知れない。文体も行間も脈絡もぼやけて眠い。誰から何と言われようと、どう思われようととにかく『僕はただ眠いだけなんだ』。覚束ないその感覚を、何とかどうにか表現しようとしたら、あるいはひょっとしてフランス音楽になるかもしれない。「光が差し込むと`虹、が生まれるよね。ラヴェルの音楽はまさにその`虹、なんだ」¹⁾と指揮者のシャルル・デュトワは語る。

「虹色のサウンド」は、音色と五感と情景が互いに干渉し、揺れて忘れてどこかへ逝く。やはり、印象派の音楽は、ステージの背後の席(これをP席と云うらしい)から聴くとあっけなく興醒めした。虹の色は、正面から見ても、色と色との違い—即ち境界線を見究めようとしたら、見れば見るほど不明朗になる。フランス人はそれをそのまま「音楽」にしたのだろう。音階も調性もリズムも、微分しても解決することなく、ぼやけて揺らいで曖昧になるだけだった。

『僕がその輪郭の細かい変化をたしかめようとするほど、僕の臉は少しずつ重くなっていった』。例の『卵型の白いガス体』が、『誰かの結婚式に出るたびに』、『スープ皿のうえ三十センチばかりのところ』に『ぼっかりと浮かんで』いる。客観にならない対象にこだわる、まるで`量子、を掴もうとする虚しい欲求—いや、先に主観の方がダウンしているのかもしれない。

フランス人ならこの破綻した「主観-客観図式」を、そのまま音楽にしようと思ったに違いない。彼らの哲学には、`死?—そんな関係ない!`²⁾というノリがある。しかし、村上春樹は違った。居眠りして、『スプーンが僕の手を離れ、食器のふちにぶつかってゴツンというかなり大きな音を立てた。隣の席で彼女が軽く咳払いをした。何人かが僕の方を見た』……。主人公の主観は共同体の`同調圧力、も、その紐帯の`消滅の予感、も客観的に鋭敏に聞き分けていた。

◎ フランス人とドイツ人

ひとは、『結婚式』に出るたびに必ず『眠くなる』わけではない。ところが、この小説では、『結婚式』の表象が、僕の『眠い』という感覚にかたく結び付いている。『いつもいつも、きまつてそうなんだ』、刺激と反応との間には不思議な一貫性がある。しかも、あのガス体の『輪郭が周期的に鮮明になったりぼやけたり』しているうちに、終宴に近づいて、僕は『真っ黒い熱いエスプレッソ・コーヒーを二杯』飲んで、『タバコに火をつけ、三十六回めのあくびをした』。

すると、今度はあっさり『テーブルの上の白いガス体はもうどこかに消えていた。/いつもと同じだ』。この顛末は、一見フランス風の気分を装っても、衣の下はフランス風ではない。要はファジーであってファジーではない、見え隠れするのはドイツ風の起承転結の體であった。たまたま起こった「偶然」が、いくら重なっても「必然」にはならない。どちらかが「虚構」であり、どちらかが「真理」である。しかし、徹底した「虚構」の確信は「真理」に通じる。この辺りに、村上文学に独特の制作の妙がある。韜晦癖はあっても、骨太の哲理が逆説的に強調される。

「ドイツ語圏の音楽を指揮すると大変。とにかく苦勞する、例えウィーンでもね。すごく上手いんだけど何かが違う。それは何か？」³⁾ 一好事家は饒舌である。デュトワは、かつて常任指揮者も音楽監督もやって、N響(NHK交響楽団)を脱構築したはずである。それでも、無類の知日家は今だにこうやって当て付けを言う、N響に、そして日本人に。「ドイツ音楽というものはオルガンみたいな響きを一点に集約させるようなイメージ」から抜けきれないと……⁴⁾。この苛立ちが、却って我々のそして村上文学の本性をあぶり出しているような気がする。

この直言は、村上文学の深層に、「武士道」のような武骨な素性を感じ取ったも同じである。語尾の多様な余韻だけで勝負して来たつもりでいた「曖昧な美しい日本の私たち」は、実は「限界文学」とも言い得る「短歌」や「俳句」を創出した。同じく言葉を微分しても、その真情は哲学的に切り詰めて潔い。日本文学の珠玉の「短編」は、その変奏であり変容であって、その現代版の「進化形」が村上春樹のそれと言ってはいけないか。それを証するのが、我々の今ここに円居する「読書会」であり、文学と哲学が端的にクロスするまさに「場所」であった。

◎ ロマンとロゴス

村上文学と西田哲学とは異質と決め付けていたが、やはり深いところで通底していた。この小説の表向きの筋立ては、安値い精神分析批評のようなタッチで展開するが、本質的な「なぜ眠いのか？」という次元になると文脈の埒は明かない。『潜在的願望…?/コンプレックス?大人になりたくない?』などと、隣りの『彼女』の『小さな手』から伝わるのは、不安を帯びた安手の『微かなコロンの香り』であった。これが終局では、『素敵なコロンの香り』として『彼女の首筋に』定着する。この間には、香水でもリーズナブルな『コロン』の自覚が実存した。

想えば深い『睡眠』は「純粹経験」に似ている。西田は「嬰兒の意識」⁵⁾を「純粹経験」の筆頭に挙げた。この無我無想の至境は、小坂国継によればいわば「前意識的」⁶⁾であって、まさに人間の生命だけで生きている。すなわち純粹すぎる経験をしている。この状態に対し「覚醒」も、あるいはこれこそ大人の「純粹経験」であり、その極北が「天才の神来」⁷⁾であって、こちらはピアニストが超絶技巧になり切ったような「超意識的」⁸⁾な佳境と言われる。

そして、少し意外であるが、この小説のテーマである『眠い』という浅い中間領域も「純粹経験」と位置づけられなくてはいけない。というより、あるいはこの不明朗な「現在意識」⁹⁾におい

てこそ、意識の求心力と遠心力がせめぎ合える。西田の定義する「経験」は、むしろこの「対立と統一」を繰り広げる「場所」においてしか実存できない。即ちここには、文学のロマンと哲学のロゴスが遭遇し融通し合う「自由」がある。さらに言うてよければ、「あるのはただ現象だけであって」¹⁰⁾、「現在意識」の眠いほどに自由で放任の、純粋な具体性に比べたら、「前意識」も「超意識」も取って付けたように抽象的で、全体主義的で不純でさえある。

そこで、さらに伴の「睡眠」と「覚醒」の中間領域を、便宜的に『眠気』と『眠い』との二つに分けてみる。『眠気』は専ら「睡眠」の統一に向かう求心力を表す名詞である。これに対し、本編の主題である『眠い』は、「睡眠」と「覚醒」との対立を象徴するだけでなく、ややもすると「覚醒」への遠心力が折角の哲学体系を打ち壊すかもしれない危険性を秘めた動詞である。この名詞と動詞との掛け合いの振幅は、無限小への収束と無限大への拡散との間を揺れ動く。そして、ドラマの振幅の幅を規定するのが、「現在」の『眠い』状態のこの「場所」である。主客合一の「純粋経験」の本懐が果たされるか否かは保証の限りではない。しかし、この対立と統一のドラマは、「現在」の『眠い』状態のこの「場所」においてこそ展開されることだけは間違いない。

◎ 「技術」と武士道

先に主客合一の実現は保証の限りではないと書いたが、これを果たす可能性として残っているのは「技術」という具体的な道である。心身の統一は主客の合一につながる。フランス音楽の奏法も、デュトワが忌々しくもN響に感じる「武士道」も含意する。『古代生物のような』手の延長も、『T定規で線を引くよう』な最先端の科学技術の進展も、政治経済社会的な成熟を含み、それは「見事な翼手竜になってあつという間に」時空を超えて拡がる。「技術」の発祥を専ら西洋起源とする発想も、その本質が近代科学にあるという思想も採らない。

原初の社会では、洋の東西を問わず自然の猛威から共同で身を守ることが、自然の恵みに与る以上に死活問題であったろう。それだけに、古くは「恐ろし」という言葉が、自然への脅威と賞賛の意を併せ持った¹¹⁾。この原初の次元に、人類に共通の「技術」の起源を置いてはいけないか。「恐ろし」とは、本質的には「恐ろし」いモノ即ち「自然」への素朴な関心であり、古代ギリシア人の「存在了解」も、かつて日本人が「自然」の生成原理を「苔ムス」と表現したような、あるいは『古代生物のような味のする』「始原の単純性」¹²⁾を湛えていただろう。

メルロ・ポンティは「始原の存在」を、「肉」という独特の概念によって普遍化した。それは「見ることや感じることの〈主体〉と〈客体〉とをおのれのうちに合わせもつ比類のない」¹³⁾「野生の存在」¹⁴⁾であり、我々は「それを〈場〉との関係においてしか知覚しない」¹⁵⁾という。ここに「場所」の古代的な発祥の記憶がある。この「場所」から性起する「思惟自身の経験的保証が、思惟の情緒性あるいは気分性」¹⁶⁾を根拠づけた意義は大きい。

しかし、プラトンもアリストテレスもその「現出の運動そのものから眼をそらし」¹⁷⁾たことから、彼らの「存在忘却とともに形而上学が始まる」¹⁸⁾とハイデガーは考えた。それは、アテネにおける理念型としての「民主主義」が、墮落態としての「衆愚政治」を招き、その過剰に疲れ果てて「哲人王政」を要請した事情と重なり¹⁹⁾、この顛末が「以後の形而上学の歴史を一貫して規定」²⁰⁾した。これを「プラトンの呪縛」²¹⁾と言い、近現代の全体主義に連なるという説もある。

かつて、自然の恣意は個が共同体に埋没するほどの結束を強要し、首長は危機管理に係るすべての結果責任を負うた。ここに統治性(ガバナンス)と被統治性(カバナビリテイ)とが融合す

る、原初の「武士道」発祥の起源がある。「場所」はその営為に^{こた}応える形で、彼らに本来的な「始原の技術」を授けた。そして、我が国ではあたかも『何十人ものウェイターがよってたかってスープ皿を下げる』ように、「水辺に茂る天然の葦原が『人の田』として開かれた」²²⁾。縄文から弥生への展開である。人類の歴史はこれと同様の歴運が「文化の深淵的な根底」を生じ、「思惟の情緒性」と「潔い責任倫理」に基づく「存在者優位の特権性」²³⁾を確立した。その精華が日本における「武士道」であった。

《おわりに》

これまで村上文学には、表面上の独特の軽い文体にかかわらず、表現において「思惟の情緒性」を、深層には「潔い責任倫理」と言い得るストイシズムを感じていた。政治的にはノンポリティカルで、所謂「ノンポリ」は70年代の若い世相からは蔑視的であつが、村上はそれに耐えて見事な「抒情と責任の文学」を貫いたと言えるのではなかろうか。その証拠に、感想文を書こうとして、万事が『眠い』ので何も書けないはずなのに、本質にあるストイシズムが清々しい始原の「武士道」を想起させ、それらの遠い連想をつなぐ幾つもの表現がよみがえった。

【注】

- 1) 3) 4) 『クラシック名演・名舞台 2025』シャルル・デュトワのコメント NHK (2025.12.31 放映)
- 2) 『現代フランス哲学に学ぶ』戸島貴代志 本郷 均 著、放送大学教育振興会(2021年) 32 頁
- 5) 6) 7) 8) 『西田哲学の基層』小坂国継 著、岩波書店(2011) 46 頁 9) 同前 40 頁
- 10) 『西田幾多郎の哲学』小坂国継 著、岩波書店(2022) 64 頁
- 11) 『古典基礎語辞典』大野 晋 編 角川学芸出版(2012) 「おそろし[恐ろし]」236 頁(筒井ゆみ子)
- 12) 『哲学と反哲学』木田 元 著、岩波書店(2004) 17 頁 13) 同前 30 頁 14) 同前 30 頁 15) 同前 31 頁
- 16) 『現代フランス哲学に学ぶ』戸島貴代志著 放送大学教育振興会(2017) 41 頁
- 17) 『哲学と反哲学』木田 元 著、岩波書店(2004) 239 頁 18) 同前 241 頁
- 19) 『民主主義—古代と現代』M.I.フィンレイ 著、柴田平三郎 訳、刀水書房(1991)5 頁 20) 同前 241 頁
- 21) 『プラトンの呪縛』佐々木毅 著、講談社(1998) 18 頁
- 22) 『日本の古代語を探る』西郷信綱 著、集英社(2006) 177 頁
- 23) 『現代フランス哲学に学ぶ』戸島貴代志著 放送大学教育振興会(2017) 36 頁

小説は未知の出来事をいかに語るか

村上春樹「眠い」を読む

村上 林造

(1) 問題の所在

「眠い」(初出「トレフル」1981年8月号)は、結婚式に出席した僕が式の間じゅう眠気に襲われ続け、式の終了とともに眠気が去るという極めて単純な話である。眠気は食欲や性欲と並んで人間の生存に不可欠の生理的欲求であるから、それ自体としては全く珍しくないことだが、僕の場合、それが結婚式という特殊具体的な場面において常に発生するというのである。そして、僕を襲う眠気をめぐって式の間中続けられる僕と彼女のやりとりが作品の中心的内容なのだが、それは次のように進行する。

「本当のことを言うと、誰かの結婚式に出るたびに眠くなるんだよ」と僕は告白した。「いつもいつも、きまってそうなんだ」「嘘じゃない。本当にそうなんだ。どうしてかは自分でもよくわけがわからないけど、とてつもなく眠くなるんだよ。わけがわからないくらい眠くなるんだ。結婚式に出ると。これまで居眠りをしなかった結婚式がひとつもないんだ」……「それ、作り話じゃないわよね」と彼女は言った。……「嘘じゃない。本当の話だよ」……「それって何かのコンプレックスかしら？」……「きっとコンプレックスよ」……「あなた、本当は結婚したいんじゃないの?」「だから他人の結婚式で居眠りをすると」「復讐よ」「潜在的願望によってもたらされる復讐行為?」「そう」……「要するに」としばらくあとで彼女は言った。「あなたはいつまでも子供でいたいよ」

彼女はここで僕の眠気の原因を明らかにしようとしているのだが、確かに我々はなにか不思議な出来事に出会ったとき、その原因を知りたいと思う。論理的な思考によって出来事の原因を知るとは、出来事の奥に潜む世界の秩序を知り、その中で生きる指針を得る有効な機会となるからである。だから、ここでの彼女の態度は、我々が日常的に行っている極めて身近な思考態度であり、ここで彼女が述べた「コンプレックス」、「潜在的結婚願望」や「子ども願望」は、僕の「眠気」の原因を人間精神の深層に求める科学的思考であって、それは僕の眠気の原因を言い当てているのかもしれない。しかし、結婚式が終わるとともに、僕の眠気は嘘のように消え去り、僕は内心で思う。

「コンプレックス? 大人になりたくない? 違うな、と僕は思った。僕はただ眠いだけなんだ」。

ここで僕は、彼女の提示した「コンプレックス」や「子ども願望」という「原因」を否定するだけでなく、眠気の原因を究明しようとする彼女の客観的な思考態度そのものに異議を申し立てているのである。僕は眠気の原因に関心を示さず、どこまでも眠いという現象に主観的に対峙し続ける。このように、彼女と僕の間には眠気に対する態度には大きな違いがあるのだが、彼女の態度が非常に客観的なものであるのに対し、それを一切受け入れない僕の態度の特異性が際立つのも確かであろう。例えば、どこまでもただ「眠い」という自分の主観的感覚にのみ拘り、客観的な見方をとり得ない僕の態度を幼児的で甘えた態度と見て、僕の人間的未成熟を読み取る解釈も不可能ではない。しかし、眠気に対する二人の態度の違いについては、彼女が眠気に対して第三者的で傍観者の立場にいるのに対し、僕が眠気に襲われている当事者であるという立場の違いを無視することはできない。同じ出来事に対しても、当事者と傍観者とではその態度が大きく異なるのは当然だから

である。

しかし、激しい眠気に対する僕の思いの切実さを、ただ当事者であるからというだけで処理しきれないことも確かである。なにしろ、僕は結婚式に出ると「いつもいつも、きまって」「とてつもなく眠くなる」のであり、「これまで居眠りをしなかった結婚式がひとつもない」のであり、僕はそのたびに眠気と戦わざるを得ないのであろう。そして、今、僕は、そのような自分の経験を彼女に向かって懸命に語っているのであり、それが「眠い」という小説の内容なのである。我々は、このことについてどう考えればよいのか。

また僕は、自分の目の前にずっと浮かび続ける「卵型の白いガス体」の様子を語っている。「スープ皿のまうえ三十センチばかりのところには卵型の白いガス体がぼっかりと浮かんで」おり、僕に「いいよ、いいよ、もう我慢してないで寝ちゃおうよ」と囁きかける。それは「輪郭が周期的に鮮明になったりぼやけたりし」、「僕がその輪郭の細かい変化をたしかめようとすればするほど、僕の臉は少しずつ重くなってい」く。「もちろん僕は何度も頭を振って目をぎゅっと閉じ、あるいは目をそらし、そのガス体を消しさろうと努めた」のだが、「いくら努力してもそれは消え去」ることなく、「ずっとテーブルの上に浮かんでいた」のである。だが、披露宴が終わりに近づき、僕が「二杯めのコーヒーを飲み、煙草に火をつけ、三十六回めのあくびをし」、「顔を上げた時には」、「もうどこかに消えていた」という。

いつもと同じだ。

ガス体が消えたところに、テーブルにケーキの箱が配られることになる。そして僕の眠気もどこかに吹き飛んでしまっている。それは結婚式の開始とともにやってきて、終了とともに消えてしまうのだ。

この「ガス体」はおそらく、結婚式に出るたびに僕を睡眠状態へ引き込もうとして僕の身体から呼びかけてくる何かの象徴なのであろうが、現実的には見える（現れる）はずのない「眠気」が「卵型の白いガス体」として僕の目の前に現れ、語りかけてくるとは、どういうことなのか。

本稿では、まず眠気そのものについて考察し、次にそれが結婚式の旅に必ず現れることの意味、それに対する僕の姿勢と小説の語りとの関係を検討し、その中で「卵型の白いガス体」についても考えてみたい。

(2)「眠気」について

そもそも眠気とはどういう現象なのか。それは、人間の覚醒時と睡眠時の境界上に生じる現象だが、一般的には覚醒時の経験と睡眠時の経験は明確に区別され、断絶している。我々は、睡眠時の経験は「夢を見る」と称して、覚醒時の経験と区別することでそれを示す。もちろん人が二つの領域を区別できるのは、それらの間に「目が覚める」という出来事があるからであり、もしそれがなければ、我々は自分の経験した出来事が夢の中のものか現実のものかを区別することはできない。つまり我々は、覚醒と睡眠を往復することによって、自分の経験が現実か夢かを知るのである。覚醒と睡眠の往復は誰でも日常的に経験することだが、両者の間にどんな通路があるのか、どうやって自分がそこを通り抜けるのかについては、我々は何も知らない。知らないままに、我々は毎日を生きているのである。また考えてみれば、死とは睡眠から覚醒への帰還（目覚め）が不可能になることであり、それは覚醒と睡眠の往復ができなくなった時、生と死の区別自体が失われるということである。つまり、睡眠と覚醒の二つの領域は（あたかも生と死のように）切り離せない表裏の関係にあり、その間には人間が関知も統御もできないある通路が穿たれているのであろう。

我々はそのようにして覚醒と睡眠の二つの領域を日常的に生きているのだが、覚醒にとって睡眠は完全な外部であり他者であって、それはあたかも人にとって死がそうであることに似ている。人にとって死は断崖に隔てられた境界の彼方であり、その向こう側（外部）をどれほどのぞき込もうとしても、人が死（睡眠）そのものを把握し、語ることはできない。死について語ろうとする人は臨死体験について語ることになりがちだし、同様に、睡眠について語ろうとすれば、多くの場合は夢について語ることになる。人がかろうじて語れるのは、二つの領域の境界上における経験だけだからである。そのように考えれば、人が眠気に襲われてから睡眠に陥るまでの時間も、その境界上における経験の一つであろう。その移行がスムーズに運ぶ場合、人は全く知らぬ間に眠りに落ちるから、そこでの自身の経験を意識することはない。だが、その移行がスムーズに運ばない場合、人はそこで様々な経験をすることになる。それは例えば、眠いのになかなか眠れない時や、起きているべきなのに眠りこみそうになる時、半分目が覚めかかったまま覚醒できない時等であり、我々はそういう二つの領域の間で居心地の悪い時間を過ごすことになる。

そこで、我々は自分の意志や思考、判断によって自分の行動を統御することができず、行為主体としての自分を保持できない。眠気以外にも寒気や吐き気、痙攣やしっくり等の生理現象は生命的要求であり、人は意志によってそれを自由に統御できないし、~~仮にその原因を突き止めても、人為的にそれを起こしたり止めたりすることはできない（もしそんなことをすれば生命の危険を伴うであろう）。~~つまり、それらは確かに生命が身体を通して人に働きかけてくる事例であり、その正体は生命的な意志としか言いようがないであろう。

しかし、人間は単に生命的存在であるだけでなく、同時に社会的要請の下に生きているから、両者が対立することは当然起こり得る。例えば、眠ることが許されない結婚式という制度的・社会的空間において僕の意志に対立して眠気が到来するというシチュエーションは、人間における生命的要求と社会的要請が衝突する現場である。「眠い」における結婚式場は、そのような戦いが繰り返される舞台であり、そこで人がどのような存在の仕方を現出するかがこの小説の内容なのである。だがとりわけ、僕が結婚式に出ると「いつもいつも、きまって」強い眠気に襲われるというのは、社会的要請下に生きる人間において、その生命的要求が主体的介入が不可能な他者として立ち現れる必然性をクローズアップする設定といえる。

その時、眠気は主体が把持できない外部的で他者的な何かとして不意に到来し、人の主体的意志を無効化し、能動的自由を奪う呼びかけとして切迫する。受動的位置に固定された人にとって、時間と空間の枠組みは機能を失い、人はその状態を「今」「これ」として対象的に語るができなくなる。そこで、もし眠気が主体を呑み込んでしまえば、その後に眠気はもはや何者でもない。眠気が外部からの他者であるのは、それに対峙する主体が能動性を剥奪された受動的な存在であるというそのことによるからである¹。眠気は人間にとって極めて日常的でありふれた現象だが、それは人の生を根源的なところから衝き動かすと同時に、人にとって最も捉え難いものであり、人はそれを自己の感覚や知覚に従って能動的に把握することはできず、それとの関係を意志的な統御のもとに語ることもできない。「眠い」とは、人間におけるそのような経験について語ろうとする小説なのである。ではそのような内容は、僕の語りの機能とどう関連しているのだろうか。

(3) 村上春樹の「小説家」観——『職業としての小説家』

「眠い」においては、僕を襲う眠気に対して、その原因を「コンプレックス」や「潜在的な結婚

1

願望」、「子ども願望」等に求める彼女と、「僕はただ眠いだけなんだ」と言ってひたすら眠気に対峙する僕が、外部から呼びかけて来る出来事に対する人間の二つの反応として対照されていたことは、先にふれた。また、未知の事象の原因を追究しようとする彼女の態度が、自然の神秘を解明しようとする科学的アプローチであり、それが人類の文明を発達させる原動力となって来たことにも言及した。では、それに対して「僕はただ眠いだけなんだ」と言って眠気の原因に興味を示さない僕の態度については、どう考えればよいのか。そのことに関連して、ここではまず、村上春樹が『職業としての小説家』で示した、「評論家やジャーナリスト」、「学者」と「小説家」の違いについて見ておきたい。

そこで村上春樹は、「評論家やジャーナリスト」、「(ある種の)学者に向いてい」るのは、「まわりの人々やものごと」に対して、「ささっとコンパクトに分析し」、「あれはこうだよ」「これはああだよ」「あいつはこういうやつなんだよ」みたいに明確な結論を短時間のうちに出す人であるのに対し、小説家に向いているのは、そういう「結論みたいなものはできるだけ留保し、先送りするよに心がけ」、それをひとつの「事例」、「サンプルとして、できるだけありのままの形で記憶に留めておこう」とする人であるという。だが、一般的に高い評価を受けるのは、ものごとを「ささっとコンパクトに分析し」、「明確な結論を短時間のうちに出す人」であろう。では、小説家が敢えてそれとは反対の態度を選択するのはなぜなのか。村上春樹は次のように述べている。

(作家とは) たとえ「あれはこうだよ」みたいな結論が頭の中で出たとしても、あるいはつい出そうになっても、「いやいや、ちょっと待て。ひょっとしてそれはこっちの勝手な思い込みかもしれない」と、立ち止まって考え直すような人です。「そんなに簡単にはものごとは決められないんじゃないか。先になって新しい要素がひょこっと出てきたら、話が一八〇度ひっくり返ってしまうかもしれないぞ」とか。

僕はどうやらそちらのタイプみたいです。(略) その時点で早急に結論を出したものの、あとになってみると、そこで出てきた結論が正しくなかった(あるいは不正確であった、不十分であった)ことが判明したという苦い経験を、これまでに幾度となく繰り返してきたからです。(略) そのせいで「すぐにはものごとの結論を出さないようにしましょう」「できるだけ時間をかけて考えよう」という習慣が、僕の中に徐々に形作られていったような気がします。これは生来の性向というよりは、むしろ後天的に経験的に、痛い目にあいながら身についたものみたいです。(『職業としての小説家』122～123頁)

ここで彼が述べているのは、結論を出さないほうがよいとか、出すべきでないとかいうことではなく、人がある出来事の意味に到達するには時間の経過が不可欠だということである。確かに、ある出来事の意味は時間が経つ中で初めて明らかになるというのは我々自身が経験することでもある。例えば、ある経験をしてからずいぶん後になって、あああの事にはこんな意味があったんだと初めて気づくことは誰にもあるだろうし、より視野を広げれば、社会的事件の意味はその後の歴史展開の中で初めて見えて来るというのもその通りだからである。

しかしもちろん、ものごとを「コンパクトに分析し」、「明確な結論を短時間のうちに出す」という分析的・科学的態度が間違っているというのではない。むしろ村上春樹は（「評論家やジャーナリスト」、「(ある種の)学者」には）その態度の有用性を認めたくて、その限界と修正の必要性の自覚を求めているのであり、確かにそれは重要な指摘であろう。そして、それに対して村上春樹が対置しているのは、結論を出すことはなるべく「留保し、先送りするよに心がけ」、出来事を「事例」「サンプルとして、できるだけありのままの形で記憶に留めておこう」とする「小説家」の態度である。それはいわば意識的に判断を中止して、自己を宙吊り状態に置くことであり、人に極度の緊張を強いる状態であるから、その態度を選択することは必ずしも容易なことではないであろう。

だが以上のように見れば、この小説において極度の眠気に対峙させられた僕が、自らの主体的判断を停止したまま、彼女が提示する原因究明への志向を拒否する態度には、ここで村上春樹が示す「小説家」の態度に似たものが見て取れるように思われる。とはいえ、「眠い」の僕は小説家ではないし、村上春樹が「眠い」の僕のなかに小説家の態度を表現していると言いたいのもない。ここで、僕はただ眠気に必死に耐えているだけであって、意識的に判断停止の態度を選択しているわけでもない。そのような重要な多くの違いを認めたくて、なお論者が両者の相似性にこだわるのは、自己判断を封印して主体の無力を受け入れ、宙吊りのまま時間を過ごすという両者の共通点にはある重要な意味が込められていると考えるからである。それを敢えて先取りして言えば、それは未知の出来事を既知に還元することなくそれとの関係を維持する方法がではないかということであり、小説という言語形式の意味もそれに結びついているのではないかということである。

(4)未知を既知に還元しない方法——小説の語り

結婚式で眠気に耐えるというのは、確かに一つのありふれた日常的出来事に過ぎないが、それはまた人間はいかにして外部から切迫する他者に対面し関わるのかという話である。眠気に襲われた僕は、主体的判断に基づく能動的行動をとったのではなく、むしろ追い詰められてその状況をやむなく引き受けさせられたのであり、それはどこまでも受け身の行動であった。しかし、理解や判断を中止した僕の苦闘は、決して僕の無力や敗北を意味するのではない。それはむしろ、未知の他者と接する一つの仕方を表しているのではないだろうか。

そもそも、未知の何かを「理解する」ということは、他者からその他者性を剥奪して、既知の何かに還元することに他ならない。ここで彼女が、「きっとコンプレックスよ」、「あなた、本当は結婚したいんじゃないの?」、「要するに…あなたはいつまでも子供でいたいよ」等と言うのは、まさに僕の眠気の原因を特定することで、それを既知の何かに還元しようとする試みである。その時、未知の対象は既知の基準によって測定され、価値づけられ、意味づけられるが、そのことによってその超越性は閉じられる。つまり、僕の眠気は、既知の全体の内部に位置づけられてその外部性を失い、その神秘性は閉じられるのである。結婚式に出るたびに必ず眠くなるという人知を超えた出来事は、その時既知に還元され、「理解」されるかもしれないが、それはあくまでもその時点における「理解」に過ぎず、時間の中で待ち続けたものにだけ姿を現す新しい地平の可能性は閉じられる。完全に自分の理解を超えたものの前にただ立ち、対峙し続けるという時間を生きること、初めて拓かれて来るモノがあるのではないだろうか。そのように考えれば、敢えて一切の前提を無効化して自己を宙吊りにし、ただ時間の中に踏みとどまる態度は、むしろ極めて高度な人間的態度といえるのではないか。そう考えた時、村上春樹がその態度を小説創作に必要な作家の態度と述べたことも腑に落ちる。小説とは、出来事の意味や原因を解き明かしたり、概念を説明するのではなく、語り手自身の理解を超えた不思議な出来事そのものに対峙し、語ろうとする言語形式であり、そういう態度によってしか語り得ないことが語り手の意図を超えて姿を現すことが期待される、そういう言語形式だからである。

*

僕は、「結婚式に出るたびに眠くなる」、「結婚式に出ると、これまで居眠りをしなかった結婚式がひとつもない」という。ここでは結婚式という具体的な場面において眠気が必要発生するのであり、その事の不思議さが強調される。そもそも結婚式とは、社会的言語意識によって人間の身体が支配される場であるが、「眠気」とはそういう場において僕の身体に呼びかけて来る言語以前の生命であり、それによって一見自明な生理現象の中に潜む未知性（他者性）が浮き彫りにされること

になる。それは、僕がその声の意味を自分の手持ちの言葉で説明してしまえばたちまち閉じられてしまうが、僕はそれを回避してただ「眠い」という言葉を何度も繰り返しながら、どこまでも自分の気分、状態、事況を語り続ける。そして、その時僕の視覚と聴覚に立ち現れるのが「卵型の白いガス体」である。その表れを、僕は次のように語っている。

頭の後ろ側がぼんやりとしびれていた。何かとても柔らかいもので思い切り叩かれたような感じだ。僕は手を伸ばしてその部分をゆっくりとさすった。スープ皿のまうえ三十センチばかりのところには卵型の白いガス体がぼっかりと浮かんでいて、僕に向かって「いいよ、いいよ、もう我慢してないで寝ちゃおうよ」と囁きかけていた。さっきからずっとそうなのだ。

その卵型の白いガス体は輪郭が周期的に鮮明になったりぼやけたりした。そして僕がその輪郭の細かい変化をたしかめようとすればするほど、僕の臉は少しずつ重くなっていった。もちろん僕は何度も頭を振って目をぎゅっと閉じ、あるいは目をそらし、そのガス体を消さそうと努めた。しかしいくら努力してもそれは消え去らなかつた。ガス体はずっとテーブルの上に浮かんでいた。ひどく眠い。

腕組みをしている僕の前にステーキの皿が置かれたが、その上にもやはり白いガス体がぼっかり浮かんでいた。「たとえばここに白いシーツがある」とその白いガス体は語りかけていた。「クリーニングから帰ったばかりのぼりつとしたシーツだよ。わかるだろ？ 君はそこにもぐりこめばいいんだよ。少し冷やりとして、それでいてあったかい。そして太陽の匂いがするんだ」

ここで現れ、僕に語りかける「卵型の白いガス体」とは、僕を睡眠状態へ引き込もうと呼びかけて来る僕の身体の声であり、まとめて言えば「眠気」の象徴といえるであろう。眠気という本来対象化できない気分が、ここでは「卵型の白いガス体」として対象化されるのである。象徴とは、それ自体としては対象化され得ないものごとを対象化（前景化、実体化）するための記号的機能であり、「卵型の白いガス体」とはまさにそのような機能を担う記号なのである。

それは、「スープ皿のまうえ三十センチばかりのところ」に「ぼっかりと浮か」び、「輪郭が周期的に鮮明になったりぼやけたり」とすると同時に、「僕がその輪郭の細かい変化をたしかめようとすればするほど、僕の臉は少しずつ重くなってい」くという具体的なカタチと動きを示す対象物として現れ、さらにそれは、「いいよ、いいよ、もう我慢してないで寝ちゃおうよ」、「たとえばここに白いシーツがある」「君はそこにもぐりこめばいいんだよ。少し冷やりとして、それでいてあったかい。そして太陽の匂いがするんだ」と囁きかけてくる。つまり、本来は何かたちも持たず、視覚にも聴覚にも捉えようのない未知の何か、そういう形で擬人化されたモノとしての対象性を手に入れるのである。それは、一人称「僕」によって語られることで、「僕」の視覚と聴覚に捉えられた対象という客観性を獲得すると同時に、僕の主観的意識の表現ともなる。つまり、一人称小説では、世界は「僕」の意識を通してしか現れないのであり、象徴は客観的世界の構造というより主体の内面の結晶となるから、語り手が理解できないものは、読者にも理解できない「謎」として現れる。つまり、ここで「卵型の白いガス体」が空中に「ぼっかりと浮か」び、僕に向かって具体的な言葉を囁き、語りかけて来ることの不思議さ、不可解さは、まさに「僕」にとっての理解不能な他者としての「眠気」の表現であり、そのような状況が読者にも率直に共有される。そのように小説の文脈の中で意味を帯びてくる「卵型の白いガス体」は、単に「眠気」という言葉では到底表現され得ない何かとなり、そのようにしてこの小説は正体不明の他者と人間との出会いの表現となる。

「卵型の白いガス体」という象徴の役割は決して小さくないであろう。

しかし、そのような象徴の機能は実は言語の機能そのものであり、さらに言えば記号によってもたらされた認知機能の一つに現れに過ぎない。そのような意味からは、言葉の象徴的機能は、単に小説という言語ジャンルの機能にとどまらず、むしろ人間の認知機能の根幹に関わる記号機能の一つである。人間は、記号を手に入れることで動物のそれとは根本的に異なる認知機能を得たのだが、

そのような機能を担う記号の始まりについては内田樹が次のように述べている。

「同じ名」で呼ばれているもののうちにはつねに「おのれを示すもの」と「おのれを示さないもの」が同時に含まれる。「何か」が記号的代理表象を経由しておのれを示す、ということは、おのれを直接的には示さない、ということであり、まさにこの「おのれを直接的に把持できるような仕方では決して示さない」ものがあるがゆえに、「それ」を記号的に名指す運動が始まるのである。(『レヴィナスと愛の現象学』73頁)

記号の意味は直接的に自らを表現できないからこそ、それとは別のあるモノを通じて迂回的に自己を表すしかないものであり、これは記号(言葉)の意味生成における根本的なメカニズムを説明したものである。とはいえ、もちろん象徴は小説だけに用いられるのではなく、言語そのものの特性であるから、問題は象徴が使われるかどうかではなく、それが意味構造をどのように支配しているかが問題である。小説における象徴は、単一の意味に還元されず、多様な意味に開かれ、読者の中で揺れ続けることが重要なのだが、それはむしろ小説という芸術ジャンルがその意味を開く仕方そのものである。例えば、小説の語り手は決して意味を固定的に閉じることをせず、逆に「おのれを直接的に把持できるような仕方では決して示さない」形で出来事を語り続けることで、その意味を読者に開き続けようとする。小説の意味が、作者や語り手によって示されるレベルにとどまらず、読者が参加することで初めて開かれ得るものとなるのはその結果である。またそこから、小説の様々なジャンル特性が要請されてくることになる。具体的に言えば、虚構性(事実とは異なる出来事を作り出すこと)や、物語性(具体的な人物、場面に即して時間的な出来事を語ること)、語り性(特定の時間的空間的位置にいる語り手の語りによって出来事を展開すること)や対話性(複数の声共存し複数の価値観が交錯、衝突することで、作品の意味が作者の声に回収されないこと)等は、いずれもそのような要請から招かれた形式であって、小説とは意味が対話の中で生成される場なのである。

まとめて言えば、小説は他者の声を消さずに共存させ、言語の象徴性や隠喩性もそれを開いたまま読者に提示する。作者の判断を保留し、沈黙のうちに他者を待つことは、開かれた言語形式の特質であり、そこに小説の特性が認められるのである。それはまた、未知の何かを既知に回収することを拒む語りであり、そこでは、言葉の意味を確定的に用いるのではなく、語り手自身がそれが何を意味するか分からないままに語り続ける。「眠い」は、そのような語りを通じて人が理解不能の他者と対面する事況を表現する作品となったのであり、そういう小説の語りの特質が、「卵型の白いガス体」という象徴の中に凝縮されているように思われる。そして、村上春樹が「小説家」には、「まわりの人々やものごと」を「ささっとコンパクトに分析」て「明確な結論を短時間のうちに出す」ことを戒め、逆に「結論みたいなものはできるだけ保留し、先送りするように心がけ」、むしろそれをひとつの「事例」、「サンプルとして、できるだけありのままの形で記憶に留めておく」ことを推奨したのは、小説が語り手自身の理解を超えた次元で迂回的に意味を開示する言語形式であることと強く結びついているのに違いない。

【各論要旨】

1、我々は何をどのように認識しているのか？(佐野 之人)

読者は「眠さ」についての明晰な言説のレベルと、「眠さ」そのものの経験のレベルの矛盾の中に置かれる。すなわち我々は「眠さ」というきわめて日常的な経験において、いかなる原因によっても説明のつかないのみならず、いかなる言説も届かない経験そのもののレベルと、言語活動のレベルの矛盾のうちを生きているということ、さらにはこの「眠さ」経験は両レベルの矛盾を際立たせるために選ばれた例にすぎず、我々はじつはあらゆる経験においてこうした矛盾のうちにあるということ、このことに読者を目覚めさせる。

最後に「残された問題」として、「この小説はどのようにして書かれたのか」を述べておきたい。すでに明らかなように、我々の生は知的直観というような仕方で、我々の認識に、たとえそれが隠れているという仕方であっても、それを含めて丸ごと、ボヤっとした仕方であれ、我々の認識に開けているのか、あるいは我々は知的直観をもちえず、我々の認識はどんな場合でもあとの、しかもこちらからの都合のよい「構成」(フィクション)であるのか、という二者択一もすでに言語による分別であり、我々の生にせよ、認識にせよ、こうした分別以前を元初としている。文学を含む芸術、哲学、宗教はこの元初の領域に踏み込み、それに表現を与える。この『眠い』という小説もそのようにして成り立っている。単なる事実や記憶の再現でもなく、単なる作り話という意味でのフィクションでもない。作者がみずからの魂の奥底に沈潜し、語り手「僕」となることによって、一見不可能に思われる、「眠い」をテーマとした小説も、それが文学であるが故に、何の不思議もなく可能になるのである。

2、判断放棄の副作用として極小化された「僕」の抵抗 (T・T)

「僕」は内面を直接的には語らず、潜在的な心情(押し付けへの反発や破壊衝動)は幻影や冗談を介して漏れ出るのみである。内面への直接アクセス抑圧→意味を見出せない→判断放棄の状態になっている。結婚式(儀式)は意味のかたまりなので「僕」は好きになりようがないが、判断放棄の副作用として自発的な抵抗は難しい。かわりに抵抗が「眠り」=「意識の切断」という極小の形で現れ、判断放棄に由来する他責思考のために「白いガス体」=「意識の切断インターフェイス」として外在化し「僕」を誘惑するという形を取っている。

3、「眠い」村上春樹 を読んで (田中克典)

この物語は、人間社会に潜む様々な諸事相に対する深層心理を、結婚式という一見誰もが普通に受け留めるようなセレモニーを題材として描こうとしたのではないだろうか。結婚式を全く無意味で受け入れることのできない僕、他方で、それを何とか受け入れようとして無理やり英語の綴りに拘ろうとするが、僕の彼女にとっては、そのことの方が全く受け入れられないのである。でも、そんなことの不思議な組み合わせで人間社会は出来上がっていく、そんな社会現象を少し暖かい視線で描いた物語ではないか。

もう一つ大切なことを忘れていた。僕にとって無意味なこと、眠くなるようなつまらないことで

も、それがあから新しい発見、より素晴らしい出会いも生まれるということなのだ。

4、規範と身体の間で揺られる生——（唐 露）

『眠い』が描き出すのは、矛盾を乗り越えた人間でも、明確な生き方を持つ人物でもない。自覚のないまま矛盾を抱え、身体感覚を頼りに静かに生き続ける人間の姿である。規範と身体、外界と内面、虚無と実感は、融和することも収まることもなく、人間の根源で揺れ続ける。主人公の「眠気」への眼差しと「身体」の語りは、答えを持たず、矛盾を抱えたまま生きることこそ人間の真実であると、淡々と、しかし確かに描き出しているのであり、現代人の生き方の核心に触れているのである。

5、「眠い」とは別の仕方（大藤 渉）

どのようにすれば別の仕方を感じ、別の仕方で見られ、別の仕方でも思考しうるようになるのか。それは、超越的な思考様式ではなされえない。そうした思考様式は、最終的に多数多様なものを一様に統一し、ある理想に従属させてしまう。他方で、構成的な思考様式は、あらゆる経験的な出来事を肯定し、その上である経験を成り立たせている構成要素の配置を問う。現在の状況を問題化する問いによって、その状況を意識すること、現状の配置を組み換えること、新しい構成要素を組み込むこと。こうした現状への抵抗によって、別の仕方を感じ、別の仕方で見られ、別の仕方でも思考しうるようになる。

現状がいかにしてこの有り様なのかを考えるのではなく、この有り様の価値や、現状をどこに向かわせるかを考える方が彼女にとって重要なことである。それはまるで羊の群れを飼う牧人のような生き方である。他方、「僕」にとって重要なのは、「コロンの香り」と繋がり、それによって自身が満たされることによって「僕」になることである。もちろんこのようなかたちで言葉にすることは、経験した後になってはじめて語りうることである。こうした言葉は、彼女が発する言葉のように、他者の生き方を矯正するに足るだけの力をもっていない。だが、「僕」の身に何が起きているのかを言葉によって組み立て直すことは、「僕」の現状への従属はどのようなものなのかを経験的なレベルで確かめること、仕方がなかった生き方を別の仕方に変えること、次の瞬間に別様の景色が見えること、につながる。それは、耐え難い現状から抜け出す糸口となる。

6、そこに愛はあるのか？（岡部 昌平）

試みにこの短編を映画化してみたとき見えてくるものがないかと考えた。

結婚とその祝宴の無限の繰り返しはいわば人類のタテ糸であり、その都度その都度の「彼と彼女」はヨコ糸なのかもしれない。時代が移り変わっても、その糸を織り上げているのは女性であり、そこに男の幕はなさそう。男には後ろも前もただ果てしない——のではないだろうか。

7、『村上春樹の武士道』(奈原 伸雄)

先に主客合一の実現は保証の限りではないと書いたが、これを果たす可能性として残っているのは「技術」という具体的な道である。心身の統一は主客の合一につながる。この原初の次元に、人類に共通の「技術」の起源を置いてはいけないか。

かつて、自然の恣意は個が共同体に埋没するほどの結束を強要し、首長は危機管理に係るすべての結果責任を負うた。人類の歴史はこれと同様の歴運が「文化の深淵的な根底」を生じ、「思惟の情緒性」と「^{いさぎよ}潔い責任倫理」に基づく「存在者優位の特権性」²⁸⁾を確立した。その精華が日本における「武士道」であった。

政治的にはノンポリティカルで、所謂「ノンポリ」は70年代の若い世相からは蔑視の的であっが、村上はそれに耐えて見事な「抒情と責任の文学」を貫いたと言えるのではなからうか。その証拠に、感想文を書こうとして、万事が『眠い』ので何も書けないはずなのに、本質にあるストイシズムが清々しい始原の「武士道」を想起させ、それらの遠い連想をつなぐ幾つもの表現がよみがえった。

8、小説は未知の出来事をいかに語るか(村上 林造)

小説は他者の声を消さずに共存させ、言語の象徴性や隠喩性もそれを開いたまま読者に提示する。作者の判断を保留し、沈黙のうちに他者を待つことは、開かれた言語形式の特質であり、そこに小説の特性が認められるのである。それはまた、未知の何かを既知に回収することを拒む語りであり、そこでは、言葉の意味を確定的に用いるのではなく、語り手自身がそれが何を意味するか分からないままに語り続ける。「眠い」は、そのような語りを通じて人が理解不能の他者と対面する事況を表現する作品となったのである。

『村上春樹全作品』版テキスト

眠い

村上 春樹

33

僕はスープを飲みながら眠りはじめていた。それは一過性の、しかし非常に強固な眠りだった。

スプーンが僕の手を離れ、食器のふちにぶつかってコツンというかなり大きな音を立てた。何人かが僕の方を見た。隣の席で彼女が軽く咳払いをした。僕はその場をとりつくろうために、右の手のひらを広げて、それを表に向けたり裏がえしたりして調べるふりをした。スープを飲みながら居眠りしていたなんて人に知られたくない。

僕は十五秒くらい右手の点検をするふりをしてからそっと深呼吸をして、再びコーン・ポタージュに戻った。頭の後ろ側がぼんやりとしびれていた。何かとても柔らかいもので思い切り叩かれたような感じだ。僕は手を伸ばしてその部分をゆっくりとさすった。スープ皿のまうえ三十センチばかりのところには卵型の白いガス体がぼっかりと浮かんでいて、僕に向かって「いいよ、いいよ、もう我慢してないで寝ちゃおうよ」と囁きかけていた。さっきからずっとそうなのだ。

その卵型の白いガス体は輪郭が周期的に鮮明になったりぼやけたりした。そして僕がその輪郭の細かい変化をたしかめようとすればするほど、僕の臉は少しずつ重くなっていった。もちろん僕は何度も頭を振って目をぎゅっと閉じ、あるいは目をそらし、そのガス体を消しさろうと努めた。しかしいくら努力してもそれは消え去らなかつた。ガス体はずっとテーブルの上に浮かんでいた。ひどく眠い。

僕は眠気を追い払うためにスープ・スプーンを口に運びながら頭の中でコーン・ポタージュ・スープと 34 つづってみた。

com potage soup

簡単すぎて効果はなかった。

「スペリングのむずかしそうな単語をひとつ言ってみてくれないかな」と僕は彼女の方を向いてそっと言った。彼女は中学校の英語の先生をしているのだ。

「ミシシッピ」と彼女はまわりに聞こえないように小さな声で言った。

Mississippi と僕は頭の中でつづってみた。s が4つ、i が4つ、p が2つ。奇妙な単語だ。

「他には？」

「黙って食べなさい」と彼女は言った。

「すぐく眠いんだ」と僕は言った。

「わかっているけどお願いだから眠らないでね、さっきからみんなちらちら見てるから」と彼女は言った。

やはり結婚式になんて出るべきじゃなかったのだ。僕はもともと結婚式なんていうものがぜんぜん好きではないのだ。花嫁の友人のテーブルに男が座っているというのもどうも妙なものだし、おまけに本当は友人でもなんでもないのだ。そんなのはやはりきっぱりと断ってしまうべきだったのだ。そうすれば今頃僕はうちのベッドの上でぐっすりと眠ることだってできたのだ。

「ヨークシャー・テリア」と彼女が突然言った。スペリングのことだとわかるまでにちょっと時間がかかった。

「Y・O・R・K・S・H・I・R・E T・E・R・R・I・E・R」と僕は今度は口に出して言ってみた。昔から漢字の書き取りとかスペリング・テストは得意なのだ。いつもクラスで一番だった。暇があれば 35 辞書ばかり読んでいた。

「その調子よ。あと一時間がんばってね。あと一時間我慢すれば、あとはぐっすり寝かせてあげるから」

僕はスープを飲み終え、手で口もとを隠して、つづげざまに三回あくびをした。何十人ものウェイターがよってたかってスープ皿を下げると、そのあとにサラダとパンが運ばれてきた。ずいぶん長いみちのりを辿ってここまでやってきた、といった感じのパンだった。

誰かが誰にも聞いてもらえる見込みのないスピーチを延々と続けていた。人生とか天候とか、そういう類の話だった。僕は再び眠り始めていた。彼女はパンプスの先で僕のくるぶしを蹴った。

「悪いとは思うけど、こんなに眠いのは生まれて初めてなんだ」

「どうしてきちんと寝てこなかったの？」

「ちゃんと寝たさ。九時間も寝た。嘘じゃないよ」

「じゃあどうしてそんなに眠いのよ？ とにかく眠らないで。私のお友だちの結婚式なんだから」

「僕の友だちじゃない」と僕は誰にも聞こえないような小さな声で言った。でもどういうわけか、彼女にはそれが聞こえたようだった。あるいは僕の唇の動きが気に入らなかつただけかもしれないけれど。

彼女はパンを皿の上に戻し、何も言わずに僕の顔をじっと見た。僕はあきらめて牡蠣のグラタンを食べはじめた。古代生物のような味のする牡蠣だった。牡蠣を食べているうちに僕は見事な翼手竜プテロサウルスになってあつという間に原生林を飛び越え、荒涼とした地表を冷ややかに見下ろした。

地表では大人しそうな中年のピアノ教師が小学生時代の新婦についての思い出を語っていた。彼

女はわからないところは得心のいくまで質問するというタイプの子供でした。そのぶんだけ他の子供よりは上達が遅いけれど、最後には誰よりも心のこもったピアノを弾きました。ふうん、と僕は思う。

「あなたはあの人のことを退屈な女だと思ってるかもしれないけど」と彼女は言った。「本³⁶当はとて立派な人なのよ」

その新婦は彼女の高校時代の同級生だった。僕は彼女と五回か六回会ったことがある。みんなと一緒にスキー旅行に行ったこともある。でも僕は彼女のことをろくに覚えてもいなかった。とくに退屈だとも、とくに立派だとも思わなかった。ただ単にろくに覚えていないだけの事なのだ。

「ふうん」

彼女は手にしたスプーンを宙に止めたままじっと僕の顔をみつめた。「本当よ。あなたは信じないかもしれないけど」

「信じてるよ」と僕は言った。「ただ今は眠いだけなんだって」

彼女は黙ってスプーンを皿の上にきちんと置き、膝の上の白いナプキンで口元を拭った。誰かが唄をうたい始め、フラッシュがいくつもたかれた。

「眠いだけなんだ」とぼつんと僕は言った。スーツケースもなしに知らない街にとり残されたような気分だった。腕組みをしている僕の前にステーキの皿が置かれたが、その上にもやはり白いガス体がぼっかり浮かんでいた。「たとえばここに白いシャツがある」とその白いガス体は語りかけていた。「クリーニングから帰ったばかりのぼりとしたシャツだよ。わかるだろ？ 君はそこにもぐりこめばいいんだよ。少し冷やりとして、それでいてあったかい。そして太陽の匂いがするんだ」

彼女の小さな手が僕の手甲に触れ、微かなコロンの香りがした。彼女の細いまっすぐな髪が僕の頬を撫でた。僕ははじかれたように目を覚ました。

「もう少しで終わるから我慢して。お願い」耳もとで彼女がそう言った。彼女は胸の形がくっきりとめだつ、白いシルクのワンピースをきちんと着こなしていた。

僕はナイフとフォークを手に取り、T定規で線を引くようにゆっくりと肉を切った。テーブルはそれぞれ³⁷に賑わっていて、誰も彼もがざわざわと語り合い、フォークが皿にあたる音がそこに入り混じっていた。

「本当のことを言うと、誰かの結婚式に出るたびに眠くなるんだよ」と僕は告白した。「いつもいっつも、きまってそうなんだ」

彼女は道に落ちていくわけのわからないものを見るみたいな目つきで僕のことを見た。「まさか」と彼女は言った。

「嘘じゃない。本当にそうなんだ。どうしてかは自分でもよくわけがわからないけど、とてつもなく眠くなるんだよ。わけがわからないくらい眠くなるんだ。結婚式に出ると。これまで居眠りをし

なかった結婚式がひとつもないんだ」

彼女はナイフとフォークを両手に持ったままじっと僕を見ていた。

「だから今回だって結婚式になんか出たくなかった。こうなるのは分かっていたんだから。でもうまく断れなかった。断ったら君が気を悪くすると思ったから」

「それ、作り話じゃないわよね」と彼女は言った。

僕は首を振った。首を振ると、頭の後がすごくソフトに疼いた。「嘘じゃない。本当の話だよ」

彼女はナイフとフォークを皿の上において、ナプキンで口もとを拭い、グラスのワインをひとくち飲んだ。そして汚らしい字で書かれた答案用紙を前にしたときみたいな顔をした。かすかに眉をひそめ、唇の端の方を囁んだ。

「それって何かのコンプレックスかしら？」

「見当もつかないな」

「きっとコンプレックスよ」³⁸

「そういえばいつも変な夢を見るんだ」と僕は冗談を言ってみた。「白熊と一緒に窓ガラスを割って歩く夢なんだよ。でも本当はペンギンが悪いんだ。ペンギンが僕と白熊にむりやりそら豆を食べさせるんだ。それもものすごく大きな緑色のそら豆で……」

「黙りなさい」と彼女がびしゃりと言った。僕は黙った。

「でも結婚式に出ると眠くなるというのは本当だよ。一度はビール瓶をひっくりかえしたし、一度はナイフとフォークを三回も床に落とした」

「困ったわね」彼女は皿の上で肉のあぶら身を丁寧によりわけながらそう言った。「あなた、本当は結婚したいんじゃないの？」

「だから他人の結婚式で居眠りをする、と」

「復讐よ」

「潜在的願望によってもたらされる復讐行為？」

「そう」

「じゃあ地下鉄に乗るたびに居眠りする人はどうなる？ 炭坑夫願望なのか？」

彼女はそれにはとりあわなかった。僕はステーキを途中であきらめた。眠くて、肉をナイフで切るのさえ億劫だった。

「要するに」としばらくあとで彼女は言った。

「あなたはいつまでも子供でいたいだよ」

我々は黙って黒すぐりのシャーベットを食べ、真っ黒な熱いエスプレッソ・コーヒーを飲んだ。

「眠い？」

「まだ少しね」と僕は答えた。³⁹

「私のコーヒーを飲む？」

「ありがとう」

僕は二杯めのコーヒーを飲み、煙草に火をつけ、三十六回めのあくびをした。あくびをし終わって顔を上げた時には、テーブルの上の白いガス体はもうどこかに消えていた。

いつもと同じだ。

ガス体が消えたところに、テーブルにケーキの箱が配られることになる。そして僕の眠気もどこか

に吹き飛ばしてしまっている。それは結婚式の開始とともにやってきて、終了とともに消えてしまうのだ。

コンプレックス？ 大人になりたくない？ 違うな、と僕は思った。僕はただ眠いだけなんだ。「これからどうするの？」と僕は彼女に尋ねてみた。

「別に予定はないけれど」と彼女。

「泳ぎにいかないか？」と僕は言った。「もう眠くなくなっちゃった。ここのホテルのプールで泳ぎたい」

「今から？」

「まだ日は高いよ」

「いいけれど、水着はどうするの？」

「ホテルの売店で買えばいいさ」

我々はケーキの箱を抱えて、ホテルの廊下を売店まで歩いた。日曜日の午後で、ホテルのロビーは結婚式の客やら家族づれやらでごった返していた。

「ねえ、ところで『ミシシッピ』という単語には本当に四つも sが入っていたっけ？」

「知らないわ、そんなこと」と彼女は言った。

「そんなことを知っていてどんな得があるのよ、いった **40**い？」彼女の首筋には素敵なコロンの香りがした。